

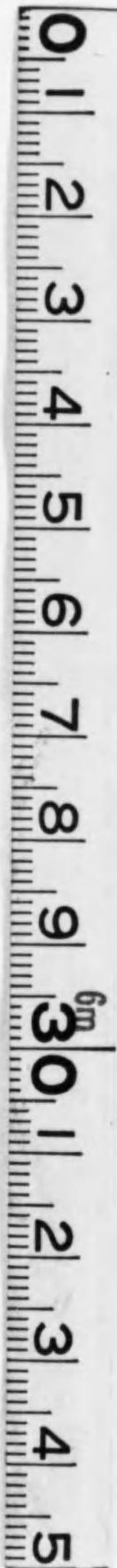
432
155

續
俳句
教書

著舟紫藤加



行刊莊文峯



始



特 223
585



續
佛敎
書句

著 舟 紫 藤 加



行 刊 莊 文 峯



目次

俳句添削篇……………一

句解篇……………七

句評篇……………一五

俳句指導篇……………二七

俳句篇……………三五

俳句添削篇

添削

以下遠慮會釋なしに、或ひは缺點を指摘したり、或ひは改作をすることもあらうかと思ふ。勿論原作者にとつては、直接句作上に裨益するところが多々あらうかと思はれるが、延いては初學者にも參考になるところがありはすまいか。そんなわけでこゝには出来るだけ多くの添削句を掲げることゝした。恐らくは原作者名を出されては、甚だ迷惑千萬だと思はれる方も尠くはあるまい。私として、又讀者としては、原作者名があつてもなくても、そんなことは問題でないのだから、こゝには一切作者の名前を出さぬことにする。以下掲ぐるところのものは、私が全部稿を新たに執筆したものばかりではなく、こゝ二三年私に直接添削を乞はれた方々の句も相當採録してあることを附記して置く。

○ 【原句】 凍月を仰いだかげへ尿たるゝ

身邊雜事の一つを句に纏めたといふだけのもので、作者としてはこゝに軽い興味を覺えたからこそ折角句に取上げたものかもしれないが、しかしこの句には活きた詩が入つてゐない。つまり餘りにも卑俗な興趣であると云はねばならない。そこでこの句に若干の品位を持たせると次のやうな句にならう。

【添削】 放尿 しばし凍月仰ぎつゝ

【同】 凍月に我が影わびし放尿す

大體内容が淺薄なものであるから、形の上に於てこの程度の品を持たせるより方法がないであらう。

○
【原句】 苔梅の枝ぶりひそと月凍る

【同】 苔梅の枝いみじくも月凍る

「いみじくも」は説明を多く加へることになつて、却つて句を邪魔してしまふ。まだ「枝ぶりひそと」の方がよろしい。ところで兩句共、句そのものゝ内容から眺めると、構想に新鮮を缺いてゐるといふ缺點がある。

【添削】 凍月に苔梅の枝ひそとあり

○
鶴岡八幡宮

【原句】 初詣で御鳩ほろく陽を招く

どこがいけないといふところはないが、誰れにでも作られるといふ取材であるだけに、特にこの作

者が詠んだところのもの、つまり作者らしい匂ひが嗅がれない。その點を惜しく思ふのである。それは漠然と作者の眼に觸れた鳩と陽、それから初詣そのことに捉はれたからであらうと思ふ。もつと違つた方向、といへば殊更らしい構ひ、即ち技巧的工夫を施せといふやうに考へられるかもしれぬが、實はさういふ意味ではなく、「成程これは」と自分の感じたものを擷んでほしいのである。

鳩と陽との交はりに、かるい感じを味付けすれば

【添削】 初詣で陽を招くかに鳩集ふ

としてもよろしいであらう。

○
【原句】 送る人送らるゝ人凍月夜

これだけではいさゝか鮮明を缺いてゐる。若しも前書でもあつたならば、幾分かは救はれる句である。それにしても別離を詠まうとして、殊更に陰性的な取材を持ち運ばれたといふ嫌ひがある。この句を添削するとすれば、まるで變つた句になつてしまふであらう。出来るだけ原作を尊重して添削すれば、次のやうな句にならざるを得ない。

【添削】 送らるゝ人影小さし凍月夜

○ 業務上の惱解決せず

【原句】 さすらひの旅路はるけき凍月夜

前書を遠廻しに諷刺したといふやうな句で、作者の詩観が稀薄である。殊に「さすらひ」「旅路」「はるけし」といふあまりにも付き過ぎた言葉の、連続的使用はよろしくない。そればかりかこの句には、「切れ」がないので、一句の締りが無い。

【添削】 われのみの旅路はるけし凍月夜

この句に忠實な添削としては、この程度のものであらうか。

○ 【原句】 浪の音ぬくしと云ふに寒迫る

【同】 寒迫ると云ふに暖かし波の音

孰れも意外に感じた氣候を、俳句に纏めたといふだけのものである。かうした感じは十人が十人得るところのものであつて、或ひは軽い驚きではあつたにせよ、極めて平凡な感じ方と云はねばならない。その點から申せば、作者の核心に觸れた主観であるとは云はれない。此の場合は、どんなところ

にさうした感じが生れたか、對象と自己の感受性とを、靜かに顧みる必要がある。さうして始めて自己の主観を捉へることが出来るといふものである。或ひはこの作者の感じ方とは違ふかもしれないが

【添削】 寒迫る松葉の光りふとぬく、

【同】 寒波ふと松の葉光りつゝぬく、

などになると、作者の獨自性といふものがあきらかに見出されるわけである。

○ 【原句】 手に息を桶の水眺め佇める

これは非常に寒い朝、かじかむ手に息を吹きかけながら、桶の水を眺めたが、桶の水は氷つてゐたであらうか、一層寒く感じられたといふのであらう。とにかく内容としてはそれだけのこと、平凡な着想であるといふより致し方がない。そこで添削をしても、内容をぐつと引き立たせるといふわけにはゆかない。たゞ俳句としての形を整へ、且つ力を加へることにすれば、次のやうな句になるであらう。

○ 【添削】 桶の水眺め佇む息白し

【原句】 思ひ出をふと春空に呼び返し

原句のやうに「思ひ出を」と最初から云ひ出すと、如何にも始めから句を作らうとした考へ、即ち作意が露骨にあらはれてゐます。そこでわざとらしさを避ける爲めに、一番始めに「春空に」と置いて、つまり春の空を眺めてゐたら、不圖かうした感情が湧いて來た、といふやうにした方が自然になり、且つ素直な句にもなつて來ます。

○ 【添削】 春空にふと思ひ出を呼び返す

【原句】 郷愁は春空果てゝ尙盡さず

原句はこのまゝで完成された句であり、表現技法からいつても、筆の入れる餘地がないと云はねばなりません。實は私としても、作者の主観即ちこの句の重心をなすところへは觸れたくないのですが、或ひは多少参考になればと思ふところから一言申上げることになります。

さて「春空果てゝ」であります、これは春空といふ對象を取扱つてあるにもかゝはず、直ちに「果てゝ」と續くので、だし抜けに主観が強調され、しかも此の句には重過ぎたといふ嫌ひがあります。何となれば郷愁そのものが、既に強い主観であるからであります。そこで次のやうに、靜隱性を

加へた添削を試みたのであります。

○ 【添削】 郷愁は春空の果てに尙盡さず

【同】 春の空消えて郷愁尙盡さず

○ 【原句】 風強くみぞるゝ畑の葉蘭かな

「風強く」の五文字が、薩張り利いてゐません。この句では雲の畑を詠んでゐるのか、それとも葉蘭を詠んでゐるのか、中心が不鮮明であります。若し葉蘭を詠むとするならば、もつと葉蘭そのものに主力を注ぐべきであります。敢てこの句に捉はれて添削するわけではないが、次のやうな句に詠んでみるのも、その一つの生かし方でせう。

○ 【添削】 葉蘭揺れ揺れて美しく雲降る

○ 【原句】 雪の日を餅搗く音の西隣り

着眼そのものに、際立つた良さがないと云はねばなりません。先づそれはそれとして、叙法上に不備な點があります。それは「餅つく音の」の「の」といふ字であります。これは利いてゐるやうで

利いてゐません。不用意な使用と云ひませうか、もう少し考へれば、更に利く文字も見つかる筈であります。

○ 【添削】 雪の日に餅を搗く音西隣り

○ 【原句】 父なき日の夕餉や浅き梅静か

この句は「浅き」が持つ主観を生かさねばなりません。従つてこの氣持を生かす爲めに、十二分の思慮をめぐらさねばならないのです。それにも拘らず、この句を見ますと、あつさり詠み捨てたといふよりも、この氣持に捉はれ過ぎた爲め、「浅き」とくどい主観を持ち運び、更にその使用法が拙かつたので、折角の句を壊してをります。くどい主観を表現しないで、裏にかくした方がまだしもであります。

○ 【添削】 父なき日の夕餉や庭の梅静か

○ 【原句】 思ひ出を追ふ雪を追ふ春の野に

技巧が勝ち過ぎた爲めに、作者の感情にわざとらしさが入つて来てゐます。それとよもに表現には

多分にくどさが加はつたと申さねばなりません。次のやうに添削しますと、句に抑揚は缺けますが、素直さが入り、句が落着いて來ます。

○ 【添削】 春の野に思ひ出を追ひ雲を追ふ

○ 【原句】 直るかしらと春を病む娘のいぢらし

最初に「直るかしら」と、餘りにも思ひ遣りな心持を置くと、却つて病氣に付き過ぎてしまひ、説明だけを多くすることになつて、折角の内容をして低下させてしまひます。そこで春を病む娘のさまを卒直に捉へて、「うつ／＼とした方が大變効果的であります。

○ 【添削】 うつ／＼と春を病む娘のいぢらしさ

○ 【原句】 菓子屋へと兒の春雨を駈け去りぬ

句の狙ひどころはよくわかりますが、原句は叙法がごつ／＼としてゐて、第三者にしつくりした感じを與へません。そこでこの句の内容を基にして、滑らかさと、圓みと、幾らかの品を與へて、次のやうに添削したのです。

【添削】春雨に濡れて童^{ワラヘ}菓子買ひに

【同】菓子買ひに兒の駈け行くに春の雨

○
【原句】雪解道かすかに鳴りて聽て春

一見原句は非常によく出来てゐるやうですが、たゞ季節の説明に終つてゐるといふ、大きな缺陷があります。即ち雪解道がかすかに鳴つて来て、やがて春が来るらしく思はれる、といふだけのことではありませんか。そこで私は「雪解道」を生かす爲め、「聽て春」といふ季節感を適當に分散させて、次の句を得たのであります。

○
【添削】雪解道かすかに鳴りて暮れんとす

○
【原句】歌舞伎見し興奮いまだ春の床に

原句はあまりに平板な説述句になつてゐます。即ち生活の事柄を順序よく言ひ並べてあるといふもので、極めて詩味性に乏しい句であります。立派な句とするにはどんな興奮であつたか、又はその興奮が周圍のものとどんなかゝりがあつたか、それらのことを表はさねばならないのです。こゝでは

取り敢へずこれだけの内容を、成る可く變へないやうに、しかも豊かな詩情を入れて添削してみませう。

○
【添削】歌舞伎見し心たかぶり春曉けん

○
【原句】叱られて泣きながら春草むしつてる

作者の作句説明によりますと、「母に叱られて泣きながら窓の下の春草をしやがんでむしつてゐる妹の姿があまりいじらしかつたので思はず出来た句です」とあります。そこで泣いてゐるのは妹であることになるのですが、原句を読んだゞけでは「妹」であることがわかりません。眞面目に實相を取り入れようとすれば、「妹」といふ文字を入れなければならないのです、これだけ複雑な取材を句に盛るためには、相當省略しなければならぬものがあります。單純化、良い意味の單純化は句を纏める上に非常に必要なことであります。

○
【添削】叱られし妹なり春の草むしる

○
【原句】紅椿咲いて青春の血は狂ふ

原句はよく理解出来ずし、又作者の感情も明かにうけとれます。併し強いて云ひますれば、「血は狂ふ」といふ語法が此の場合感情表出としては強烈過ぎるといふ嫌ひがあり、尙又かうした誇張の語法が單に俳句に限らず、各方面に於て使ひ古されてゐるといふ嫌ひもあります。そこで一寸趣を變へて、多分に内容に温かさを持たせ、且つは調べを圓滿ならしめるために「鳴らんとす」にしませう。それから「咲いて」は重複といひませうか、たゞ「紅椿」といふ二字だけによつても、それだけの内容を含めてゐることになりますから、省略した方がよろしいと思ひます。

○
【添削】 紅椿青春の血潮鳴らんとす

○
【原句】 夢現酒によふて我母を戀ふ

原句には季感を入れて然るべきであるのに、季感が入つてゐません。これはわざと季感を排斥されたものでなく、うっかりして忘れられたものと思はれます。次には着想が極めて平凡であります。かうしたことは誰しも経験されるところで、それ故にそれが直ちに平凡であるといつて非難するのではないが、その際作者として、何か身に迫つたものがあつた筈であります。それを捉へてこそ俳句になるのであります。こゝが即ち作者性といひますか、個性ともいふべきものであります。今假りにこの

句を添削して獨立した一句たらしめようと思はすれば、どうしても添削をする私の句になつてしまふのであります。何となればこの句は全然獨自性を缺いてゐるからであります。そこで止むを得ないことではあるが、成る可く私の感情を入れないうで、即ち原作者の氣持を尊重して添削してみることによませう。

○
【添削】 春かなし酔ふてひたすら母を戀ふ

一讀して理解されますやうに、「春かなし」と「ひたすら」といつた言葉が持つ氣持によつて幾分俳句に獨自性を與へることが出来たのであります。

○
【原句】 空暗夜着きし安堵やいなゝかず

【添削】 闇夜に着きし安堵や櫓馬いなゝかず

原句を讀むと、果して何時頃の作であるか見當が付きません。即ち前句と同様に季感を没却してゐます。そこで私はこゝに櫓馬と入れたのですが、これには大いに理由があります。といふのは「いなゝ」と言葉があるから、「櫓馬」を運んで來たのではなく、第一作者が樺太に居らること、次に冬季作られた句であることを、添削依頼の手紙によつて知り、尙ほ且つ櫓の馬を詠まれた句が他に二

三あつたからこそ、「襦馬」を用ひることゝなつたのであります。原句は糊足らずの句といひませうか、非常に大事なことが省略されてゐますため、一句全體がぼんやりしたものになつてゐます。これは作者が意識して省略されたものでなく、始終目に觸れてゐる關係上、遂忘却されたものであらうと推察されます。併し俳句は第三者が見ても充分理解出来るやう、飽くまでも表現上の吟味を怠つてはなりません。

○ 【原句】 梨の花日をうしなひて白き風

この句は目前の光景を克明に描寫されてゐますので、俳句としては纏つてゐます。併し何といつても、光景の説明に墮してしまつたといふ缺點があります。これを救ふには、説明を省くより他致し方がありません。といつて説明を省いてしまふと、この句が益々貧弱なものとなつて來ます。そこで思ひ切つて説明を省く代り、この光景の或點を強調して、そこに多分の詩情を盛り上げるといふことにしなければなりません。

○ 【添削】 梨花白し白し太陽を失なへる

【原句】 針仕事出すや蛙のめかり時

ぼやくと生温かく、自分の目を蛙が借りて行つてしまふほど、寝くて寝くて堪らない。そこで寝氣さましに針仕事を始めたといふのでありませう。かうした事柄は勿論卑俗なことに屬するが、更にこの句のやうな詠み方をすると、殊更らしくなつて却つて趣向が薄いで來ます。それよりは、針仕事をしてゐたが、自分只一人のせいか、一入蛙の目借時の感を深くした、と素直な姿に雅致を求めた方がよろしいのであります。

○ 【添削】 針仕事ひとり蛙のめかり時

○ 【原句】 明星や我がベットの近くあり

概評すれば、この句には感情が不足してゐると云はねばなりません。更に嚴密に云へば、感情の捉へ方が不確實であるといふことも出來よう。即ち「明星」が何のために用ひられ、何を利かせようとして持ち運ばれたのか、それが判然としてゐない。この句は此處に大きな缺陷があると申さねばならない。勿論私は作者の氣持を聞いてゐないのだから、作者の意圖されたところを理解することが出來ない。そこで大凡の推定になるが、多分に陰性の感情を盛られたものであらうとして、次のやうに

添削したのであります。

【添削】 春愁ふ明星我れに近くあり

どうしてもベットを用ひやうとされるならば、それが若しも病床の折のベットであるならば「○○病院」と前置をされてもよろしいし、又は「○○病に罹りて」と前書を置かれてもよろしい。この句に於て突飛な「春愁ふ」を用ひたのは、陰性的感情をして效をあらしめることと、更に季感を入れることの二石二鳥の役割を演じさせるためであります。

○
【原句】 春風の青柳ゆする晝長し

青柳といふ文字を用ひてあるのですから、風が春風であることはいふまでもありません。従つて「春」といふ文字は無駄であるとも云へるのであります。それよりは無駄な「春」といふ文字を用ひないで、その文字の二音分を他の方に生かし、内容にも出来る丈けの幅を持たせるやうに工夫しなければなりません。それがためには、いろいろな生かし方もありませう。その一例として、私は次に簡単な添削法の一つとして改作句を示して置きます。

【添削】 川風の青柳ゆする晝長し

○
【添削】 冬分けの雪のやまびこ啄木鳥か

この句では「冬分け」がわかりません。啄木鳥が鳴いてゐるけれど、山には雪があるため冬であるには相違ないが、今や目前の光景は春になりさうな氣配を示してゐる、といふ意であるのかどうか。實際に添削に迷つてしまいます。そんなわけであるから、次に示す添削句は或ひは當を得たものでないかもしれない。

【添削】 冬こゝに山のやまびこ啄木鳥か

○
【同】 啄木鳥のやまびこ冬を雪を消す

○
【原句】 時雨晴る雲茜して明日の幸

結局原句では「明日の幸」がわかりません。或ひは相當大きい希望を含めたる幸であるかもしれないし、或ひは唯明日はお天氣が好いであらう、といふくらゐの幸であるかもしれない。いづれにしても幸そのものが、荷が重過ぎるといつたかたちであります。これを訂正すれば、全然變つた句になつてしまいますから、唯表現上に圓滑を求めて置く程度にします。

【添削】 明日は幸時雨のあとに茜さす

○

【原句】 焼後に強くめばゆる若草の

【添削】 焼後に若草強く芽ばえたる

作者のねらひどころは、若草が強く芽ばえてゐるといふところでありますから、「若草」といふ文字を最後に持つて來られたのは、一寸句の勢ひを殺した感じがします。尙ほ云へば、中心點を多少鈍らせてあるとも見られるのであります。そこで若干説明的な詠法になつた嫌ひはありますが、「若草」を中七文字の初めに持つて行つたことにより、右の缺點を充分に補ひ、且つ靜穩な感じを與へることが出來たやうであります。

○

【原句】 松籟のいびきや濱の守人か

松籟に對して「いびき」は大袈裟過ぎて、一寸釣合はぬ言葉であります。それよりはまだ「ひびき」と云つた方が、より適切であります。併しこの句に於て、「ひびき」とは云はなくとも、「松籟」といふ文字が使はれてゐます以上、充分「ひびき」の内容が入つてをります。それから惜しいことに、この

句には當然入る餘地のあるにもかゝらず、季節の感じが入つてゐません。そこで添削する私は、多分春の作であらうかと思つて、春といふ文字を入れることにしたのであります。それでも内容には殆んど違つたところがなく、否却つて句に深みといひますか、詩情を盛ることが出來たのであります。

【添削】 松籟に春の濱邊を守る人か

○

【原句】 師の句集今宵銀河の流にそうて

この句は私の句集「會津」が、銀河のありありと見られる宵に配達され、それを嬉しく讀み續けたといふ内容を詠まれたらしいのであります。さてこの句の不備な點を申し上げますが、銀河は宵も夜も現はれるものですから、敢て宵といふ文字が宜しくないとは云はれませぬが、この句の場合に於ては、「今宵」の三音二字を、もつと他の内容に活かした方が得策であります。といふのは「今宵」以上に内容を深める、即ち作者の感銘を打出す言葉があるからであります。次に一句全體の語調が「流れにそうて」なる字餘りの表現であるため、非常にごつごつとしてゐます。この語調を整へて内容に圓滑さを與へることも、極めて重要なことと云はねばなりません。

【添削】 師の句集銀河に添うて届きたる

○
【原句】 雪溶や無理に顔出すフキの花

「無理に顔出す」といふ擬人的叙法は非常に詩美性が乏しく、構想そのものが美しい詩情を孕んでゐないだけに、卑俗な感を抱かせるのであります。そこで多少趣向を更へて、勿論幾らかの詩美を加へることとして、「俄かに落の花開く」として見たのであります。これは原作句に忠實な添削でありまして、私としては好まざるところであります。何となれば上から下まで、餘りにも季節に捉はれてゐるからであります。

○
【添削】 雪解や俄かに落の花ひらく

○
【原句】 櫻見に櫻の國の人ならで

原句に依りますと、櫻の國でない人即ち外國人が日本の誇りとする櫻を見てゐるといふだけで、單にそれだけのことを言ひ表したに過ぎません。この作者を初學者扱ひにしてはどうかと思ひますが、俳句には作者の感じた「感情の美」が入つてゐなければなりません。この句にはそれが缺けてゐると云はねばなりません。そこでいさゝかなりとも美感情を句に移入することとして「異人の顔のたゞな

らず」と訂正し、櫻花を鑑賞してゐる外國人の顔の表情に、一句の重點を置くことにして見たのであります。

○
【添削】 櫻見る異人の顔のたゞならず

○
【原句】 蟻は地圖に大海渡り日本に向へ

この句も矢張り外國に居られる方の作でありまして、地圖を擴げてゐたところ、蟻が這つてきた、その蟻に向つて、さあさあ、太平洋を渡つて、自分も戀ひ慕つてゐる日本へ行け、と叫ばれたものでありませう。作句の動機及び構想は、十二分に理解出來ますが、何せよ表現上にぎこちなさがあります。従つて内容を傷けないやうにして、これだけの缺陷を取除くやうにしなければなりません。早急の添削故に、果して一句の音律を調へることが出來ますかどうか。

○
【添削】 蟻は地圖の大海這うて日本まで

○
【原句】 汗やたらどこまで伸びるお陽欲しや

○
【添削】 日時計に陽を欲り我身汗やたら

添削した句が酷く變つてゐますため、一寸喫驚されるでせう。併しこれには成程と頷かせるものがあります。それは作者がこの句に添へられた説明があるからです。それを申上げてみることにします。「鹽釜神社参拜の節境内に林子平の考案なる日時計ありしも生憎曇天にて見るを得ず、急坂なる石段を登りし爲汗をかく事しきり。時を知る陽を欲して止まず」と、このやうに作句の課程を忠實に語つて居られます。これに依つて大體は推察されたかと思ひますが、中七文字なる「どこまで伸びる」が不適切といひますか、どこまで伸びるお陽、と續きますので、作句のピントが合つてゐないやうに感じられます。そこでさうした言葉を打ち捨て、作者が現に見つゝある日時計を入れ、日時計をはつきり浮き出すやうにしたのであります。

○
亡妻三年忌に墓所にて

【原句】 香焚くに語る口なし五月雨るゝ

【添削】 香焚くに應ふ聲なし五月雨るゝ

前書を「……墓所にて」としますと、非常に忠實な作句ではありませうが、何となく平凡な感じを抱かせられます。といふのは墓所にて香を焚くことが、あまりにもありふれたことであり、それから

五月雨の降りくるところで香を焚くことが、それほどに生きないからであります。尙ほ又「語る口なし」は、亡妻を指したのか自分を指してゐるのか、そのへんが判然とせず、上五文字の「香焚くに」と下五文字の「五月雨るゝ」の中間に置いたことは、突飛な用法となつてゐます。總じて云へば、中七文字は妥當を缺いた用語であり、それも影響してか、一句そのものゝ内容として迫力感を缺いて居ります。そこでこの句は、寺の中か室の中か、法要の際に於ける作となし、それから作者が御佛へ話をしかけたやうにして、「語る口なし」の不完全な用語を、「應ふ聲なし」とした方が遙かに効果的であります。

○
【原句】 炎天下 鋸齒鋭く 陽があまた

實によいところを詠んであります。取材がよいといふよりは、着想、つまり作者の直感がよかつたと云はねばなりません。「陽があまた」の言葉などは、素晴らしい言葉であると申さねばなりません。またこの句に難を申上げねばならぬのは、「炎天」「鋸」、そして「陽があまた」とあるので、既に鋸齒の鋭さは含まれてゐるのです。それでこの「鋭く」といふ四字に代る言葉、しかも適當にこの内容を引立てる言葉を欲しいと思ひます。この句はどうしても捨てゝしまふには惜しく、何とかとし

て立派な句たらしめたいものであります。ともかくもこの作者には一考を煩はしたいと思ひます。ここでは多少の缺陷を補ふ程度に、即ち只今私の頭に働いた程度に添削して置くこととしませう。

【添削】 炎天下あまた陽の觸れ鋸齒

○
【原句】 九月盡母の白髪めつきりと

よく纏つてはゐますが、たゞ内容に作者らしいものが見出されぬ、といふうらみがあります。即ち秋なるが故に淋しい、恫びしいといふ感情に捉はれ、さうした素材を句に取入れられたものに過ぎません。これは社會一般に流れてゐます感情、即ち社會感情でありまして、この作者の獨自な感情は少しも入つてゐません。母の白髪を取扱つても、もつと作者の感情を深く移入したならば、獨自な内容を持つたもの、それはとりもなほさず、第三者をぐつと打つところの句が作られたものに相違ありません。それには作者らしいものが取入れられますから、私の想像の及ばぬものが入るに違ひありません。従つて私がこゝでとやこやと添削の出来る筈のものではないのであります。ともあれその一つの例として、参考までに申上げるならば、母の白髪が此頃殊に目立つて見え、それが只今灯下においてありありと認められたといふやうなところ、それを句に取扱つたとしますと、次のやうなものになります。

う。

【添削】 九月盡母の白髪灯に浮かぶ

○
【原句】 蒼穹しゞに蜻蛉取る子居ず暮れ惜しむ

詩情が働き過ぎて、それが整理されてゐない句といひませうか。この作者にはさうした傾向がありますから、その點に留意されたならば、縦横に圓滿優美な句をものされることと存じます。強烈な詩情、まことに結構ですが、それが中心となつて他を統一融合させてゐるやうに、出来上つた句に就て吟味されるやうおすゝめします。さて此の句でありますが、何はともかくも複雑な内容、言ひ換へれば盛り澤山な内容を、要するに單純化すればよいといふことになります。

【添削】 空いつかかはたれ蜻蛉取る子見ず

これで音律上にも、大分すつきりとして来たかに思はれます。「かはたれ」はいふまでもなく黄昏ですから、原句にも則した添削といつてよろしいでせう。たゞ細かい感情の運びには、若干相違もありませんが、それは止むを得ないことであると云はねばなりません。

【原句】 峰の霧喜雨晴雨のよそほひに

いさゝか取材がごたごたしてゐます。それといふのは相手のもの、及びその周囲のものにこだはり過ぎたからであります。そのために折角の實感句でありながら、可成作意のある句と見られることになつたのであります。さうした缺點を除去しようとするれば、句作の場合、作者は何を詠まうとするかそれをはつきりと決めて、其の際周囲にごたごたしてゐるものは、幾ら惜しくとも省略しなければなりません。かうした句の添削は難事中的難事といはねばならず、逆も原作に忠實には添削出来ません原作は餘りにも對象に捉はれてゐますので、句柄が小さく、詩美も狭少であります。そこでほんの一例を示すといふ方法で、この句の内容の若干を活かしてから、次のやうな句にしてみました

【添削】 峰の霧晴雨のあとの人聲に

【同】 峰の霧喜雨の村々人聲す

○
【原句】 秋風やごろ寝に覺めり大きくさめ

内容も表現も粗雑で、投げ遣りなところがあります。内容や表現に、何時も句の品といふことを考へてほしいと思ひます。この句は十人が十人、平凡に接するところの事柄を、たゞ十七文字に纏めら

れたといふに過ぎません。それだけに内容そのものが、俳句たりうるところの價値を、持合せてゐないといふことになります。句の下段に用ひられた「大きくさめ」、これは冬季のものとして、われわれに概念化してゐますから、本當に内容が空虚なものと言はねばなりません。従つてこの句を添削するとは無理であり、況して佳き句たらしめることは、到底出来ない相談であります。さういふわけではあります、句らしい句にするため、假りに中七文字に一寸した個性を入れて、次のやうな句にして見ませう。

【添削】 ごろ寝さめむなしまゝに秋の風

○
【原句】 またゝきの秋星へこの想ひさらす氣か

自分の感情を批判的に取扱つたため、對象が生かされなかつた句であります。それから感情に捉はれ過ぎてゐますために、「この想ひ」が作者だけに強くひびいてゐて、第三者即ち鑑賞者にはひびくところがありません。そこでかうした句は、獨善の句であるといふ譏りをうけても、致し方がないでせう。この缺點を征服するためには、出来上つた自分の句をよく吟味し、果して不備なところがないかどうか、そこをよく調べなければなりません。感情の融合統一を求めて、次のやうな句にするのも一

方法でありませう。

【添削】 わが想ひあはれ秋の星またゝくに

【同】 秋の星またゝけばわが想ひあはれ

○
【原句】 畫家の瞳の光に少女は秋燈に恥らふ

構想は大變結構であるが、俳句の構成に全く詩を落としてしまつたから、その殻だけが残つたやうなものであります。つまり詩を詠はずに、詩をだらだと説明してしまつたことになります。佳き句たらしめるには、この説明を、この長い説明以上に感じさせるやう、素材の頂點と頂點とを繋ぎ合せてほしかつたのです。さうすればもつと音律もよくなり、内容にも一段ときびしさが加へられるのであります。といつて私が、優秀な見本をお目にかけるといふわけにはまゐりません。何となればその場所に私が居合はさないのですから。とはいひますものゝ、参考になる程度のものに添削を試みませう。

○
【添削】 畫家きびし少女は秋の燈にためらへる

○
【原句】 稻の穂や田園は詩中に暮れんとす

この句の場合「詩中」とは、逃避的用語であります。田園の詩とはいひますものゝ、餘りにも漠然としてゐます。作者は稻の穂の出揃つてゐる田園に、どの程度の詩を感じたものでありませうか。作者が感じた田園の詩そのものゝ、全部でもよし、又はその一部分でもよろしいから、何かしら句に着けてほしかつたと思ひます。俳句には作者のいのちが必要であり、それが或時には作者のちからと變り、作者のひいきと變り、作者のいきほひなどに變つてゐることもあります。この句には、さうしたものが缺けてゐると申さねばなりません。そこで今假りに作者が氣に入るか入らぬかは知らぬが、詩感の一つを取上げて、次のやうな句にして見ます。

○
【添削】 稻の穂に唄ふ唄など暮れんとす

○
【原句】 菊の香や廻覽板の届けらる

在來の俳句を標準にして云へば、この句などは上乘な句、殊に時局をなかなか巧みに取り入れた句として、賞讃を博するかもしれないが、私の唱道する俳句はもつと藝術的でなければなりません。即ち廻覽板が届けられた、菊の香りがしたといふ事柄を羅列しないで、その行動や行爲からうけた作者

の高い感情を裏打ちしてほしいのであります。それでこそ其處に作者も活き、又時代もはつきりと活かされるわけでありませぬ。と云つてしまへば極めて簡單であります。實踐はなかなか六ヶ敷いものです。一足飛びに上達することは出来ませぬから、さうした心構へをもつて、着々と句作をすゝめられるやう希望します。美事な添削ではないが、ほんの一例を次に示してみることになります。

【添削】 菊の香や廻覽板の文字太き

【同】 廻覽板菊の香につと讀み終へし

○

【原句】 果もなくとけゆく鳶の譜秋空へ

實に良い構想であります。どちらかといひますと、作者ばかりが陶然とその光景に浸り切つてゐまして、第三者にはいささか不親切な嫌ひがあります。勿論第三者といひましても、想像をめぐらしますならば充分作者の詩境に浸ることも出来ませう。それだけに張りの弛んだところのある句といますか、もう少しのところ、詩的象徴性を調和させて貰ひたかつた、と思はれる作であります。わかり易く云へば、鳶の譜の特異性か、或ひは果てなく融けゆく鳶の譜の流れなどを。そんなところに留意してみますと、次のやうな句も出来上ることになります。

【添削】 鳶の譜は果つることなし秋の空

【同】 鳶の笛流れ秋空果てしなし

鳶の鳴く聲を「鳶の笛」としてみますと、非常に變つた趣きが出てくるやうであります。

○

【原句】 妻戀し戀なほ戀し天の川

獨り天の川を打仰いで、遠く離れてゐる妻を戀ひ慕ふ切情を詠まれた句であります。これを簡單に云へば、妻を戀ふ心と天の川の、この二つから句が成り立つてゐます。従つて餘程非凡な表現法でも採らなければ、平々凡々な句になつてしまひます。この句も勿論その弊に陥つてゐますが、更に失敗を招いたところは、徒に戀といふ文字にこだわり過ぎた點であります。これほど澤山戀といふ文字を用ひなくとも、對象の何ものかに托して、切實なる愛戀の情を僅かな文字に、詠みおさめることが出来る筈であります。それには種々なる表現法がありますが、此の句の場合は對象が限定されてゐる丈けに、少々六ヶ敷いところもあります。

【添削】 天の川妻戀へば光降る如し

【同】 妻戀の星あきらかに天の川

の如くにすれば、如上の缺陷を大分補ふことも出来るではないかと思ひます。

○ 【原句】 岩 かげに夕立釣翁依然たり

この句を見ると、夕立が一體どうなのか、はつきりしてゐません。思ふに作者は、夕立の降つてゐる岩かげに魚を釣つてゐる翁が、夕立などにかゝはらず、依然として釣糸を垂れてゐる、といふところを狙はれたものでありませう。さうすると、「夕立の岩かげに」としなければなりません。それから釣翁の文字がありますが、古來魚釣の翁に對しては、「釣叟」といふ適當な言葉があるのですから、これを用ひた方がよろしいと思ひます。そこでこの句は、即ち作者の意圖されたところを詠まうとすれば、次のやうにして始めて、纏つた句となるわけであります。

○ 【添削】 夕立の岩かげに釣叟依然たり

○ 【原句】 困りたる句作に鯛の聲あり

この句は内容そのもの、即ち着想も餘り芳しくはなく、更に叙法にも不備な個所が多いのであります。誰しも靜かに讀んでみれば領かれますやうに、非常に語呂が悪いではありませんか。假りにも自

分の名を附けて發表する以上、内容は勿論のこと、出来るだけ音律上にも調子を整へるやう、工夫しなければなりません。確かにこの作者の頭なら、もう一寸さへ注意したならば、これ以上調べもよくなり、且つ内容までも整つてくる筈であります。努力の出し惜しみではありませんか、呵々。勿論ただ文字の置換へだけでは、この句が良くなるとは申されません。それ故に多少は叙法を變へることになりますが、出来る丈け作者の求められた内容に中心を置いて、添削してみませう。

○ 【添削】 まとまらぬ句案にしばし鯛よ

○ 【原句】 散兵戦草香は久し點呼吾れ

平凡な句作を好まず、何かしら自分らしい句にしなければ氣がすまない、といふ眞面目な意圖がうかがはれ、非常に力強く思ひます。實にさうした激しい氣持、即ち身に則した句を生まんとする努力は、尊いものと云はねばなりません。かやうなわけで最も重要な句作態度に就いては、少しも非難すべき點がありません。それではこの句が果してよく出来てゐるかどうか、叙法上の問題に論及いたしませう。惜しいことに、中七文字をなしてゐる「草香は久し」は、作者が重要視して用ひられたほど、この句には利いてゐません。殊に「久し」といふ文字が鮮明を缺いてゐるのです、作者でない私

が、作者と同様の感じを得ることは出来ず、そこでとやこや言はれませんが、思ふに表現に無理な個所が出来てゐるか、或ひは表現違ひの個所があつたことゝ申さねばなりません。

【添削】 點呼 吾れ草いされ 壓し散兵戰

○ 【原句】 ビルデング屋上高く春を吸ひ

ビルデングの屋上と云つてあるのですから、「高く」といふ文字は餘り利いてゐません。この句を作者の表現に従つて解釋しますと、ビルデングが大空高く聳え立ち、さうして春を吸つてゐるかに見える、といふことになります。果して作者はそんな積りで此の句を詠まれたものか。思ふにさうではなくて、作者自身がビルデングの屋上に立ち、心ゆくまでに春の氣に觸れたといふのではあるまいか。若しさうであるとすれば、

【添削】 ビルデング屋上に春の氣を吸ひぬ

と素直に詠み下された方が、妥當な作句法であります。

○ 【原句】 蛇食うて戰勝の春男子われ

この句には何か前書でもあれば、成程と思はれ、讀者の胸を打ちますが、たゞこのまゝでは、蛇を食ふことがどれだけ戰勝とかゝはりがあるのか、第三者に疑問を抱かせます。併しこれが戰線を詠まれた句であるとしたならば、非常に感銘を與へることになります。そんなわけで、次のやうに添削してみるのもよくはないでせうか。

【添削】 男子われ戰勝の春に蛇を食ふ

一讀この句からは、頑敵何ものぞ、さあ、戰勝の祝ひに蛇を食はうとしよう。我に漲る衝天の勢ひを何とするか。蛇を食つて元氣百倍、敵の心膽を寒からしめてやらう、といったやうな風事がうかゞはれるではありませんか。

○ 【原句】 冬夜霧なに積める荷か灯を點もし

この句は「灯を點もし」と切つてあるので、非常にだれてゐます。「灯を點もし」と五文字を使はなくとも、「灯」の一字で結構間に合ふ筈であります。その上に「冬夜霧」とありますために、「灯」と「夜」が重複したかたちになり、どちらも利いてゐません。これでは對象の把握に、非常に無駄な骨を折つたことになります。些細なことのやうですが、かうしたところへも氣を付けてみると、一

句の隙を活かすといふことも、なかなかおろそかに出来ないものです。作者が工夫された取材と、同じ内容を盛ることは不可能ですが、次のやうな句にしてみれば、ずつと句が引き立つて來ます。

【添削】 何を積む車か狭霧灯に揺るゝ

【同】 灯に揺るゝ積荷なり冬の霧しきり

○
【原句】 寒風裡さはれその性さぶ花八ツ手

「その性」に内容を負はせ過ぎた嫌ひがあります。従つて第三者には、作者の意圖するところが、明確に傳達されません。そればかりではなく、何が何だかわけのわからぬ句である、といふ譏りを受けるかもしれません。俳句は詩的感情を必要としますが、しかもそれは他のものと好ましく連繋してゐるやうな、表現形式を採らなければならぬのであります。かうした句を添削することは、作者の意圖するところが充分に酌み取れないだけに、極めて困難なことであります。やゝそれに近いかと思はれる句に、改作してみることにしませう。

【添削】 花八ツ手その性に風かゝはらず

【同】 風強しいよいよ白き花八ツ手

○
【原句】 機械轟々話消されて今日の冬

「機械轟々話消されて」こゝまではわれわれの身近な現實相を、明かに且つ迅速に感じさせるものがありますが、その次に「今日の冬」と置かれたので、急に間延びした感を抱かせられます。その際作者には、もつと切迫した季感があつたに違ひないと思ひます。恐らくこの作者は、俳句らしいものに纏めるためか、さもなくば面倒臭いといふところから、こんな不釣合な言葉を運ばれたものではありますまいか。「今日の冬」に代る適當な言葉、それは作者でない私が如何とも仕兼ねます。單純に考へて、「今日の冬」以上迫力のある季感と云へば、差當り次のやうなものでもよくはないかと思ひます

【添削】 機械轟々話消されて息白し

【同】 機械轟々話消されて冬日暮れ

【同】 機械轟々話消されてふと寒き

最初の「息白し」は暖房装置の部屋では台無しになりますが、「機械轟々」の位置必ずしも「息白し」の感がないとはいはれません。

【原句】 冬なるに舞ふ火蛾追ひて讀書遅々

説明が多過ぎるといひませうか、作句の中心がぼんやりとしてゐます。従つて「冬なるに」といふいかめしい言葉も、亦「讀書遅々」といふおもしろ味のある言葉も、共に利いてゐません。この句はいふまでもなく事柄の説明に終つてしまつたもの、と云はれても仕方がありません。これをして活かさうとすれば、冬の火蛾に中心を置いて、其他のものを従屬させるやうにしなければなりません。

○ 【添削】 冬の火蛾戯るゝともなし讀書遅々

【原句】 蚊帳に灯へ郷愁の渦いとゞしや

表現技巧にのみ支配され、結果作意でかたまつた句のやうに見られるのであります。最悪の缺陷といへば、郷愁にこだはり過ぎたこと、その表現が念に念を入れ過ぎたことは、この句をして理智一點張りのもの、にしてしまつたともいひませう。内容そのものが深いやうで深くはないのですから、境地の高い句にすることは無理ですが、

○ 【添削】 蚊帳の灯は淡し郷愁そゝらるゝ
とした方がまだしもであります。

○ 【原句】 枯葉かと思ししが羽搏ち霧に去る

恐らくは鳥であらうと思ひますが、この句では虫と見られても致し方がありません。それだけに叙法に不完備なところがあると云はねばなりません。それは敢て言ふまでもなく、着想の面白さ、即ち枯葉のやうに見えた、といふそのことにのみ氣を取られたからであります。そこにもう一步の餘裕を持つたならば、嘸ぞかし秀れた内容を掴まへられたことゝ察します。

○ 【添削】 鳥あはれ枯葉と見しが霧にたつ

【同】 鳥いと枯葉と見しが霧に翔ぶ

○ 【原句】 初裕母愛肌にふれてくる

作者だけがわかつて、第三者には理解出来ない句であります。強いて解釋すれば、初裕を造つて呉れた母が自ら、倅である作者へ着せた、その時我子であるといふ肌に觸れたといふのであらうか。それとも母が初裕を送つて呉れたので、作者はそれを身につけようとする、その時しみじみと母の愛を肌感じた、といふのであらうか。つまりは母が造つて呉れた初裕により、母の慈愛を感じたとい

ふことではないでせうか。それならば十人が十人感ずるところで、特異性のある内容とは申されない
のであります。かやうな次第であるから、こゝに一寸した味を付けて次のやうな句にすれば、一段と
際立つてまゐります。

○ 【添削】 初裕母の面輪を追うて着る

○ 【原句】 小春日や日々濫讀の己を視出づ

中心の缺けた句であります。小春日と中段下段の事柄とが、何の關りを持つてゐるのか、無理に結
び附けたとしか見られません。それから「日々」といふ文字を用ひてあるがため、「小春日や」と置か
れた強い言葉は、まるつきり効力を發揮してゐません。不用意といへば、不用意な用法でもあります
この失敗の原因は、澤山の内容をごでごとと盛られたためであります。そこですつきりとした俳句た
らしめるため、出来るだけ省略することが賢明な策と申さねばなりません。

○ 【添削】 小春日よろし濫讀の眼をさらす

○ 【原句】 秋窓邊 葦の灰がころくと落つ

平凡な取材でありますから、うつかりすると無味乾燥な内容に陥つてしまひます。そこをよく承知
されてゐますためか、軽い趣向にもかゝらず、新鮮な感じを取り逃さず、秋のある日のスケッチを
淡々たる文字のうちに移されたのであります。この句で作者は「ころくと落つ」に相當の力を加へ
られたものでせうが、秋窓邊を活かす關係上、いさゝか大袈裟な感じがいたします。まあ、狙ひが一
句全體に漲る秋の佗びしさにありますから、「ころと落つ」か「吹かれ落つ」位でよろしいでせう。

○ 【添削】 秋窓邊 葦の灰が吹かれ落つ

○ 【原句】 ふと箒とめける聲や 歸り花

「ふと箒とめける聲や」と「歸り花」とが、はつきり分れてゐますので、勿論歸り花は活きず、作
者が庭を掃いてゐる箒を止めたこと、及び誰れかに呼びかけた聲も活かされてゐません。大體「箒と
めける聲や」といふ叙法が無理で、聲そのものが薩張不可解であります。無難な句を詠まうとすれば
歸り花を見つけたので、急に庭掃きを止め、箒を持ったまゝ打眺めたといふところを、素直に詠まれ
た方がよろしいのです。更に此處に或詩味を加へて見れば、次のやうな句にもなります。

○ 【添削】 歸り花つと見まもりて箒置く

【同】 歸り花しむに見まもり箒置く

○
【原句】 柿喰ふ食卓に秋を匂ひ見る

季節の説明に傾いてしまった作、といはねばなりません。といふのは「柿」といふ文字によつて、濃厚に秋を感じさせるにもかゝらず、又「秋を匂ひ見る」とあるからです。結局秋、秋、に捉はれ秋を表現することだけに力が入り、作者の感情を入れたつもりでありながら、ちつとも入つてゐない作となつてゐます。そこでこの句を添削し、少しでも良い句にしようとするれば、この句の内容とは違つたものを作者から聞かなければなりません。こゝではそれも出来ませんから、假りに或程度聞いたこととして、次のやうな句に改作します。

○
【添削】 柿喰ふ食卓に故郷を偲びつゝ

○
【原句】 埋火を起して母と語らひぬ

事柄の説明に終つたといふ失敗句であります。これでは核心を忘れて、輪廓だけを十七文字にしたに過ぎません。俳句は説明でもなく、輪廓を纏め上げることでもありません。最も大切なものは、詩

であります。詩を掴まなければ俳句にはなりません。この作者がこの場合に詩を掴むとすれば、母と語りつゝあるときの母の聲、或ひは話の中にあらはれたことなどを、巧みに取上げて詩化し、それを句に入れるやうにしなければなりません。さうすることによつて始めて、この作者独自の句となるのであります。一例としてこゝに掲げてみませう。

○
【添削】 母の聲やさし埋火掻き起す

○
【原句】 吐く呼吸のようやく白し淺き冬

本當にこの句の通りであります。それ以外には何も無いといつてよいでせう。即ち此頃自分の吐く息が、漸く白く見えるやうになつてきた、これは空氣が冷えてゐるからである、さう云へば初冬でもあるから、當然なことであるわい、といつたところを詠まれたものであります。始めから終りまで季節の説明、洵に忠實な報告である、といふより他に言葉がありません。表現法は實に美事ですが、中味が空つぽであります。季節に捉はれず、又一つの事に捉はれず、對象の交錯するところに、詩美を發見するやうに心掛けてほしいのであります。一步視野を擴げて見れば、こんな句にもなります。

○
【添削】 吐く息のようやく白し野の虛ろ

○ 【原句】 股火鉢句作やたらに疲れたる

作者としては、やたらに句作をしたので疲れた、そこで股火鉢をしてゐる、といふところを詠まれたものでありませうが、字義に則して解釋しますと、股火鉢をしながら句作をしてゐる、と、そのうちに酷く疲れてきたといふことになります。一寸變に感じられるのは、句作をして疲れることは、まあよいとして、「やたらに」がちつとも利かないのです。珍らしい、好ましい副詞であるがために使用したものであらう、とこんな譏りをうけても致し方がありません。

○ 【添削】 股火鉢句作疲れをつれくゝに
と繼やかに、平らに叙述された方がよろしいと思ひます。

○ 【原句】 春雨の後日照り渡る隅田川

季節の説明に傾き過ぎた嫌ひがあります。即ち先頃まで春雨が降つてゐたが、それが霽れ上つて、隅田川には日が照つて來たといふのであります。いふまでもなくこの句には、新しい見方もなければ作者独自の感じ方も入つてゐません。誰れでも作れる極めて平凡な作であると云はねばなりません。

こゝに一寸した作者の感情を入れますと、一段と光る句になるのであります。

○ 【添削】 春雨の後けざやかに隅田川

○ 【原句】 雨煙る鈴懸並木芽萌ゆ頃

一氣に讀んで來ると、直ちに對象が目前に迫りますが、最後に「頃」とありますので、俄かに弛んでしまひます。といふのは目前の現實を中心に詠まれてゐるにもかゝはらず、「頃」といふやうな、つまり不明瞭な、凡そ現在とは懸け離れた内容を結び付けられたからであります。かういふやうな場合には、矢張現在に結ぶに現在を以てし、現在をしてより以上活かすやうにしなければなりません。

○ 【添削】 雨煙る鈴懸並木萌えんとす

○ 【原句】 天つかむ街路の裸木霜牙ゆる

街の裸木が天を掴むかのやうに、鋭く尖り立ち、そこには霜が牙をえてゐる、といふところでありませう。このやうな擬人法を採られた作者としては、こゝに相當の自信もあり、且つ又こゝに重心を置かれたものでありませう。併しこの句に於ては、この擬人法が句の大半を占めてゐますので、たゞそ

れ丈けのことか、不消化な主観であるに過ぎない、と見られてしまいます。尙ほそのために、「霜牙ゆるる」も殆んど効力を失つたかたちになつてゐます。この露骨な主観を、美のるつぽに入れて潰過すれば、非常に品もよくなり、美はしい句にもなるのであります。

【添削】 天を射る街の裸木霜牙ゆる

○

【原句】 喰ひさしの芋生焼か爐にひとり

この句を分解してみますと、「喰ひさしの芋」、「生焼の爐に」、「ひとり」の三つであるのに、或ひは「喰ひさしの芋」、「生焼けの爐にひとり」の二つに分けられるのであります。いづれにして此處に許すことの出来ない、無理な言葉があります。それは「生焼けの爐」であります。作者としては「芋の生焼」、「生焼の芋」を詠まねばならなかつた筈です。それから原句に忠實に解釋すると、「ひとり」が自分一人を指してゐることにならず、芋が「ひとり」であるやうになつて来て、これ又無理な不完全な使用と云はねばなりません。

【添削】 喰ひさしの芋生焼か爐にわびし

○

【原句】 春淺し桃の節句に雪が降り

「春淺し」と「桃の節句」と二つ、春の季節語が重なり、それに「雪」といふ冬の季節語が入つてゐます。結果これでは季節を叮嚀に説明したことになり、内容は空つぽであると云はねばなりません。作者の狙ひどころ、作者は何處に中心を置いて、句を詠んだかと問はれても、何の返答も出来ないでありませう。季節を二つも三つも重ねることがよろしくない、といふではありませんが、短かい文字の俳句でありますから、出来る丈け無駄な季節重複を避け、文字をして有効に使用するやう、常に心懸けてほしいのであります。この句は取材が取材ですから、とても良い句には添削出来ませんが、次のやうな句にすれば、相當缺陷も救はれるかと思ひます。

【添削】 子等囃す桃の節句に雪ちらく

○

【原句】 祖先幾代茶花愛で此處に粗衣粗食

構想は甚だ結構ですが、事柄が多過ぎますために、句が全體としてだれてゐます。これだけの内容のどれを捨てても惜しいでせうが、ともかくも一句を活かすとすれば、他を犠牲にして一つを強調しなければなりません。まあ云へば、御馳走を喰べ過ぎたために、消化不良になつた句といふところで

せうか。取材が多い場合には、それを壓縮して重心を定め、そこにびりゝとした辛さを加へると、素晴らしい句になつて來ます。不取敢この内容を壓縮して、私は次のやうな句を得たのであります。

【添削】 家古りぬ茶の花愛でてこともなし

【同】 お茶の花楚々として貧乏のしけれ

○
【原句】 淺草の噪音きこゆ風邪の窓

「風邪の窓」が無理であります。作者としては、風邪に臥してゐる部屋の窓、といふ意に採られたのですが、文字上からいへば、風邪を引いてゐる窓といふやうなことになるのであります。それからこの句には、作者自身の氣持、即ち風邪に對する氣持が出てゐませんので、句が淺薄なものになつて居ります。

○
【添削】 淺草の噪音きこゆ風邪うつゝ

○
【原句】 熱去らず瞳そのまゝ冬景へ

想の纏め方、文字の運び方、共に十分なものであり、作者の作者らしいところも窺はれる句であり

ます。たゞ難を申上げれば、最後の「冬景へ」が堅た過ぎる、といひませうか。上中段の滑らかな表現に對して、いさゝか釣合を欠くところがあります。

○
【添削】 熱去らず瞳そのまゝ冬野へ

○
【原句】 一泊に櫻案内や國訛り

「國訛り」の生かし方が明瞭を欠いてゐます。櫻見物に田舎の人が來たので、國訛りを聞いたといふのか、郷里の人が來たので、自分も國訛りを平氣で出して、共に花見をしたといふのか、そのへんがちつともわかりません。又「一泊」と限定されてゐるのは、或ひは事實でありませうが、それが花見に、それから國訛りに何のかゝはりもないやうなもの、別言すれば、薩張り利いてゐないと云はなければなりません。事實に拘泥して、取材をばらばらに取入れられたゝめ、纏まりの附かない句となつたものであります。

○
【添削】 國訛りなつかし櫻見つゝゆく

として、簡単な前書でも附けられるがよろしいかと思ひます。

【原句】冬のサイレン食慾廊下になり止まず

この叙法ですと、食慾が「なり止まず」に懸りますので、實におかしなことになります。それだけこの句は、叙法上に大きな誤謬があることになります。出来る丈けこの内容を、この表現文字を傷けないやうにして、添削してみませう。

【添削】冬のサイレン食慾そゝり鳴り止まず

○ 【原句】図書館の窓に希望の灯がともる

「希望の灯」には違ひありませんが、そこまで言ふことは、鑿穿過ぎた叙述になりまして、第三者に嫌味をさへ感じさせることになります。換言すれば、図書館に遷き過ぎた、図書館に捉はれ過ぎた表現といふことになります。尙ほこの句には、充分季感の入る餘地があるにもかゝらず入つて居りません。

○ 【添削】図書館に冬あたゝかき灯がともる

平凡な句になりましたが、原作者の欠點を補ふとすれば、このくらゐのところか關の山でせう。

【原句】解近の親しみなれど月冴えよ

【削削】解近の親しみなれば月冴えよ

【原句】冬ぬくし灰皿に淡き蠅の影

【添削】冬ぬくし灰皿に蠅の影淡き

【原句】踊り子の寒紅つけて更くる夜を

【添削】踊りの子寒紅つけて更くる夜を

【原句】日に戯るゝ掌に南天の實はつぶら

【添削】日に透かす掌に南天の實はつぶら

【原句】寒椿見ては驛長目を洗ひ

【添削】寒椿見つゝ驛長目を洗ふ

右五句はほんの一二字を更へたか、若しくは文字を置き換へただけに過ぎません。それで果して句がよくなつたかどうか、それをよく吟味して下さい。第一句は、「親しみなれど」がきこえない感じがいたし、その内容が「月冴えよ」といふ希望と命令を含まれた言葉に對して、しつくりといたしません。第二句は、原句の叙法ですと「蠅」が後ろに持ち運ばれたため、大事な対象である蠅が、十二分

に活かされないこととなります。それ故に文字を置き換へたわけでありませぬ。第三句は上段と中段の接続なる「の」の文字が効果薄弱であるといひませうか、「は」に近い効果を、或ひはそれ以上味を持たせようとされながら、不用意のために、それほど効用を發揮させることが出来なかつたのです。それよりは無難な叙法といふつもりから、「踊りの子」としたのであります。第四句は、「日に戯るゝ」の表現が主観を働かせ過ぎたため、南天の實のつぶら、が弱められてくるのです。最後の「南天の實のつぶら」を明瞭に生かすため、あつさりとした言葉「日に透かす」に變へたのであります。第五句は表現が文章の一ト切のやうに、抑揚を欠いてゐますから、語呂を整へたまでのことでもあります。

○
【原句】 あれやこれなにやら嬉し福壽草

お正月のために、何とはいふことなしに嬉しくてならぬ、といふところを詠まれたでせうが、福壽草をもつと活かすことが出来なかつたか、福壽草の着きが薄いやうに感じられます。

○
【添削】 うれしさを包み切れず見し福壽草

○
【原句】 戦地への初便りまた書きにけり

これだけでは餘りに平凡であります。國民學校の生徒でも、このくらゐのことは綴れさうであります。誰れも彼れも出来るといふ句でなく、幾らかは自分の感じを加へるやうにしなければなりません。例へば次のやうな句にしても、よろしいではありませんか。

○
【添削】 初便り戦地へまたもホ句添へて

○
【原句】 降りやまぬ湖面の雪を食うてみる

湖面の雪が中心でありますから、それを強調し、それに附屬するものは、あつさりと片付けるのが巧みな詠法であります。この句に於ては、湖面を粉飾し説明してゐる「降りやまぬ」を捨てた方が、却つて句を引締めることとなります。

○
【添削】 湖面の雪あまり美し喰んでみる

○
【原句】 雪々の積るさへなく年明くる

「積るさへなく」は省略され過ぎて、妥當を欠いてゐます。それから「雪々」は大袈裟過ぎて、重苦しい感じを與へます。さうしたところを除去して、丸みを加へ、且つ勢ひを加へてみることにしま

せう。

【添削】 雪積る音さへなくて年明けし

○ 【原句】 千人針縫ふ女學生冬驛に

それだけのことです。冬の驛に、千人針を縫ふ女學生がゐた、この驛にもゐた、感心なことだ、ただそれだけのことでありまして、社會一般の人々の眼に寫る、あまりにもありふれた光景の一つに過ぎません。この光景から、感じた何ものかを捉へて、それを句に詠まなければならぬのであります。

○ 【添削】 千人針縫ふ女學生つゝまし冬驛に

女學生は子供であるから「こ」とルビを振り、見た感じを「つゝまし」と云へば、原句よりはずつと内容のある句となります。

○ 【原句】 打ち晴るゝ氷柱雫に陽は高し

對象表現に片寄り過ぎたところがあります。こゝに作者の感情が適當に按配されたら、心のある句として親しまれることせう。

○ 【添削】 日當りの氷柱の雫したしみぬ

○ 【原句】 眸には見えねど凧のうなりの潔し

字餘りがいけないといふのではありませんが、この句は再考すれば、字餘りなどを解消して、ずつとリズムのよい句たらしめることが出来ます。目に見えない、とまで云つてあるのですから、「潔し」は穿ち過ぎた言葉となつてゐます。

○ 【添削】 見えねども凧のうなりのいや高し

○ 【原句】 空の色雪の白さか眼定まらず

雪が眞白であるため、空の色を見分けることが出来ず、どれが雪で、どれが空であるか、それを眺めてゐる自分の眼が定まらない、といふところを詠まれたものでせう。つまりは

○ 【添削】 大空を雪の白さに見失ふ

と詠んでもよろしいわけせう。これに若干表現上の妙味を加へてみるならば、次のやうな句になります。

【添削】 雪いよゝ白し大空見失ふ

○ 【原句】 白雪の重たし松の色青さ

雪に映える松の色の青さを、即ち色彩感に重点を置いてあるのですから、「重たし」はあまりにも思ひ過ぎた言葉であり、此の場合用ひられることは不適當であります。

【添削】 松の色青し白雪重たけれ

この句よりは次の句の方が、遙かに内容もよく整つてゐることを較べ見て下さい。

○ 【添削】 松の色あくまで青く雪降りぬ

○ 【原句】 門戸うつ音に目ざめて子の顔

未完成の句であります。内容上にも表現上にも、再考すれば、まだまだ訂正すべき箇所が見當る筈であります。門戸を打つ音は何であるか、子の顔はどんなであつたか、季節は何時であつたかなどと考へれば次々と欠點が見つかります。

○ 【添削】 木枯の門戸打つ音に目ざめし子

○

○ 【原句】 乙女一人訪れてけり春姿

春姿の乙女が一人、訪れて来てくれたといふのでせうが、「春姿」が切り離れてゐるため、取つて着けたやうな、しつくりせぬ感じをうけます。

○ 【添削】 待つとなき春着の乙女訪れぬ

と自分の感情を加味して、素直に詠まれるがよろしいと思ひます。

○ 【原句】 初明り雪の嶺々を占めんとす

別にこれと云つて不完備な箇所はありませんが、中七文字「雪の嶺々を」が何とかならぬか。内容はそのままでも、音律上調整する方法を考へてみませう。

○ 【添削】 初明り雪嶺々々を占めんとす

原句と同じことなのですが、これで内容を俄かに引立たせたやうな感じもしませう。

○

○ 【原句】 礦泉の温氣は夜目にも白く長かりし

温泉の湯氣の説明で終つてゐます。たゞそれが巧みな叙法であつたために、嫌味を感じさせないといふ程度のものです。その場合もう少し他のものを取り入れることが出来なかつたか。思へばこの句は季感も忘れて居ります。

○ 【添削】 礦泉の温氣は夜目にも白し冬ぬく、

○ 【原句】 雲焼けて故山枯野を風渡る

この句に於ては「故山」が中心となるべきものでありますから、ふるさとに主力を置き、其他をして従屬せしめなければなりません。それにもかゝはらず、最初に「雲焼けて」とありますので、自然象が第一義になり、ふるさとが薄れてしまつたかたちになつてゐます。次に「故山」の文字ですが、枯野がありますから、唯故郷だけでよろしいかと思ひます。

○ 【添削】 ふるさとの雲焼けて枯野風渡る

○ 【原句】 歌うたひの女よ若さの秋の夜

「若さの」は秋の夜を形容してゐますが、若さの秋の夜とはどういつたところのものか、第三者に

は曖昧であります。作者丈けが知つてゐても、第三者に感じさせることが出来なければ、何の役にも立ちません。さういへば内容自體が甚だ貧困だ、といふことになります。例へば

○ 【添削】 歌うたふ女に問はん秋の夜

句としては陳腐であり、感心出来ませんが、句にする一方法を示したものであります。

○ 【原句】 酒倉の冬のひかりや人淨し

「冬のひかりや」と、こゝに感嘆詞を用ひられたため、「人淨し」が俄かに存在を薄め、十二分に効を奏し得ないかたちとなつたのです。「人淨し」を生かすとすれば、勿論この場合生かさねばなりませんから、感嘆詞を外すことが肝要であります。それにしても、それ以上内容を際立たせるやうに、工夫しなければならぬのです。

○ 【添削】 酒倉に冬日射し來つ人淨し

○ 【原句】 活け梅の開く匂ひつ籠りつ、

「開く匂ひつ」とは無理な詠法であります。「匂ひしつ」を省略されたとしても無理であり、更に又

句ひつと終止形で切つてあると、「籠りつゝ」への接続に妙を欠いてしまいます。無難な叙法を採るとすれば、句ひに籠る、といふやうにしなければなりません。

○ 【添削】 活け梅の開く句ひに籠りつゝ、

○ 【原句】 出勤の萬兩赤き陽を寂しむ

この句を正直に読み且つ鑑賞するならば、出勤の萬兩云々となり、何のことかわけがわからなくなりますが。作者自身はわかり過ぎてゐるために、かうした誤謬を侵しても氣が附かないで居られることと思ひます。この種の欠點を矯めるためには、句を作り上げてから、自分の作であることを打消し、さうして欠點を探し求めること、即ち自作でなくて他人の作である、と見做して、よく鑑賞してみることが大いに役立ちます。

○ 【添削】 萬兩の赤き陽寂しむ出勤す

○ 【原句】 海あはくがらくと冬陽落つ

「がらく」と冬陽落つ」は、仰山過ぎる表現法です。誇張もよろしいですが、それは他のものと結

びつた場合、其處に現實以上のもの、即ち實感を基礎にして、そこに超現實の詩が形づくられるやうなときに限ります。かやうな時には誇張が誇張でなくなり、作者そのものから生れた詩感になつてしまひます。そのやうな誇張ならば結構ですが、この句にあらはれてゐるやうな、單純で大袈裟な叙法は獨りよがりの感激である、とあつさり嘲笑されてしまひます。誇張の度合を薄めて、次のやうにすれば、成程と第三者に感じさせるところがありませう。

○ 【添削】 海淡しからくと鳴る冬陽落つ

○ 【原句】 木影澄む日輪白し冬の池

○ 【添削】 冬の池に日輪白し木影澄む

最初に「木影澄む」と置いたために、何處に木影が澄むのか、その點が不鮮明になり、従つて「日輪白し」も亦、鮮明を欠いて了ふのであります。言葉を置き換へて素直に表現すれば、結構わかる句となるのであります。そのためには、自分の句を幾回も讀んでから、欠點を見つけることが肝要であります。

【原句】 悲哀滿つ此の日淺間に雲かゝり

【添削】 あはれ此の日淺間に冬の雲滿つる

前書を置かなければ、よく理解されない句であります。冒頭の「悲哀滿つ」は、半ば強制的な哀願的な感情語をなしてゐますので、第三者に或る壓迫感を得させるやうであります。尙又漢字であるために、ぎごちなさも件つてゐるといへませう。最も作者が力を入れた筈の「此の日」は、作者丈けにわかつて第三者には通じません。それ故に前書を必要とする、と申上げたのであります。

○

【原句】 墓一つ半天の月に我微動せず

【添削】 墓一つ月に佇つ我れ動かざる

對象にあまりにも忠實であつたため、すべてをそのまま表現することとなり、その結果句の重心を定めることを、おろそかにしたといふべきであります。或ひは半天の月であつたでせう。更に作者自身は微動もしなかつたでせう。併し一句全體として圓滑を計る上から、このやうに角を取ることにしたのであります。

○

アメリカカ兵武裝解除

【原句】 大御稜威に星條旗下りて空高し

【添削】 御稜威今星條旗下りて冬霽るゝ

前置があるので、敢て季感を入れなければならぬといふのではありませんが、「空高し」の内容を盛るに、充分に季感を入れても内容を傷けるやうなことがあります。この句は冬季作られたのでありますから、右のやうに「冬霽るゝ」としたのであります。内容は非常に異色あるところを詠まれたのですから、別に申上げるところはありません。添削の方が一段と緊張味の加つたことを、吟味していただき度いのであります。

○

【原句】 ロツキーのまこと霧吐く今朝の秋

【添削】 今朝の秋ロツキーまこと霧を吐く

【原句】 故山糺さばや落葉の重き手に

【添削】 故山糺さばや落葉は手に重き

【原句】 秋燈下古書懐しく神と戯る

【添削】 秋燈下古書懐しく神に觸れ

【原句】 小春濱坐せば潮音汽笛に和す

【添削】 小春濱坐れば潮音汽笛に和す

【原句】 鳥の巢を仰げば光る松落葉

【添削】 鳥の巢を仰げば光り松落葉

第一句は今朝の秋を明瞭に活かすため、並びに語調を整へるため、一番最初に置き換へたのであります。第二句は「落葉の重き手に」が表現上適切なる措置でないため、「落葉は手に重き」と妥當な表現を採つたまでのことであります。第三句は「神と戯る」が大袈裟であるばかりでなく、不敬な内容を暗示することにもなりますから、平穩に「神に觸れ」にしてみました。第四句は「坐せば」がぎこちない感を抱かせますから、平易に「坐れば」とする方が無難であります。第五句は「だらだら」と文章體をなしてゐますから、句に抑揚を與へるため、松落葉の前で小休止を求めることにしたのであります。

○
【原句】 枯蔦を塀より取る父老いし

【添削】 塀に立ちて枯蔦を取る父老いし

原句は廻りくどい叙法を採つてをり、尙又一字足りないので、音律上可成の不自然を伴ふやうであります。さうした欠點を補ふため、若干説明的な詠法にはなりますが、右のやうに添削したのであります。

【原句】 客盆に津輕の味あり秋林檎

【添削】 津輕の香たゝへて林檎盆にあり

表現に品と味とがありません。そのために同じ取材でありながら、極めて無味乾燥な句となつてゐるのであります。更に云へば、捉へられたところが漠然としてゐて、何處に美の中心點を置かれたかも明瞭ではありません。かやうなわけですから、取材の消化、句品を與へること、詩美の中心を置くこと、一句全體としての圓滑を計ること、などに留意して添削した次第であります。

○

【原句】 誰ぞ居る葺の山より俚謠洩る

【添削】 菌山唄など洩るゝたまたまに

大分違つたかたちに添削してしまひましたが、結局内容に於てはさうたいした違ひもないのであり

ます。即ち作者の構想は、茸狩りに来た山に誰かゝ居るらしく、時々俚諺などが聞えるといふのであります。原句について一言中上げれば、「誰れぞ居る」が他所行きの言葉であつて、次の言葉との接続がしつくりしないのであります。

○

【原句】 枯柳 流れる星の渡る鳥

【添削】 枯柳 星いま流れ鳥渡る

何せよ取材そのものが平凡といひませうか、獨自な着想がありません。又季節に捉はれ過ぎた作ともいふべく、「枯柳」「渡り鳥」「流星」と季語の寄せ集めのやうにも採られるのであります。従つて添削するにしても、餘程内容を變更させない以上は、佳い句にすることも出来ません。さうまでして、作者の心を踏み躪つてよいかどうか。こゝでは叙法上の不備な個所丈けを訂正して、第三者に理解出来る程度の句にしたのであります。

句解篇

初鴉城のしのゝめひるがへす

こゝのお城は會津の鶴ヶ城である。正月三日の朝、兄の子達を連れて鶴ヶ城址を逍遙したとき、城の奥なる番杉に啼き群れてゐる鴉をみつけた。鴉の聲は或ひは高く或ひは低く、しかも悲しい歴史をかこつものゝやうにきこえる。それは私がこの地會津に生れ、私の先祖がこのお城に立てこもり、身のあらんかぎり刀を揮つたにもかゝはず、遂に會津の城が陥つてしまつたといふ、消えない血が私の身體に流れてゐるからであるかもしれない。おもへば五ヶ年間毎日中學の校舎の窓から城の石垣をみつめ、敵愾心に若い血潮を燃やしてゐたのであつた。十餘年前であつたか「敗けて賊軍會津はかなし芥子の花」の句を吐き、城の石垣に佇んで悲憤の涙を拭いたことさへもあつた。

餘談はさておいて、飯盛山から城の上にまたがつてゐる東雲は、初鴉の異様な啼聲に呼應してか、折々ひるがへるかの如くに見えるのである。これはいふまでもなく、會津に生れ、會津の血潮を湛へてゐる私に、會津の歴史をつゝむ自然相が、僅かに感應するところがあつたからではあるまいか。

雪つもる思ひあるなし鶴ヶ城

ちらちらと雪が降つてゐる。見れば見るほど、行けば行くほどに美しい。しかしこの雪はこのお城

に積るだらうか、いや積ることはあるまい、などと私はお城に向つて反問してみた。無心の雪、無心の鶴ヶ城はそのまゝでもいゝ。けれども雪と鶴ヶ城とを胸にたゞみ込んだ私は、それをそのまゝにして置くわけにはゆかない。自然「思ひあるなし」と、甚だ單純ではあるが、こんな表現を採らしめたことも止むを得ないものと云はねばなるまい。

城まぶし歴史のなかに雪が降る

美しい朝陽に塗られた鶴ヶ城は、さながら偉容と尊嚴を誇つてゐるやうに見うけられる。城のとこるところは降りそゞ陽、それがしばしば私を當惑させては、新しい想像を創つてくれる。おゝ、まぶしい、と心の中に叫んだであらうか、その途端に會津戦争の繪巻物があらはれ、やがて幻であることを意識すると同時に、小さい可愛い雪がちらちらと降つてゐたのである。一見無理な表現であるが「歴史のなかに」といふ幻想に結びついた「雪が降る」の現實は、過去より現代に亘る「城」といふ大きな背景と、更に作者に異常な感覺を喚起した「まぶし」といふ言葉によつて、相當すくはれてゐるものと云つてよろしい。

その枯木ふるさとの枯木人を見ず

夕方、私は郷里の小さい驛に降り立つて、時雨れてゐる木立を打眺めた。何時來ても親しく突立つてゐる樹木、又幾歳になつても親しまれる樹木、かうした感慨はこの驛通りを歩くごとに抱くことので、敢て今日といふ今日の感じではないのである。ともあれ、ふるさとの町故に、ふるさとの樹木故に、この感を深うするのであるかも知れない。蕭然とか蕭條といふ形容は、如何に冬枯れの今日とはいへ私のふるさとは當嵌らない。私は親しさに堪へきれず、「その枯木」と呼び、つゞいて「ふるさとの枯木」と呼んだのである。それにしても心のどこかに満たされず、或る親しさを求めてゐた。それは郷里の人を見たいこと、人と話したいことであつたが、私の知る人とはなかなか出逢はない。

亡父の塚亡父の田見えてゐるしぐれ

驛へ出迎に來てゐた婢から傘をうけとつて、直ぐに亡父の墓へ詣でた。二重廻しに入れて來た蜜柑を取り出して塚に供へ、「父上、今月は遅くなりましたが、只今來ました」と月まへりの挨拶をして、しばらく雨にぬれながら佇んでゐた。すると、墓からは見えやうとも思はれなかつた私の家の田「月ノ瀬」の田面が見えるのである。これは周囲の樹木が全く葉を脱してしまつたため、遠目が利くやうになつたのである。

「斃れて後やむ」と口癖にしてゐた父が、買ひ殖した田甫も見える見える。そこで私はこのよろこび

を亡父に聞かせるやうに、素直に時雨を通して「亡父の田見えてゐる」といつたのである。

寺僧會釋すあきらかになる冬日

郷里にゐて佛のことに仕へ得ぬ私は、法城さんによく依頼もし、又歸郷する毎にお目にかゝつてはいろいろと話などを交へることをたのしみにしてゐる。五十歳を起えたくらゐの法城さんであるが、僧らしい僧といはうか、實によく出来た方である。百ヶ日法要に招じ入れた折、法城さんから聲をかけられた。そのときの謹嚴な、そして明朗な態度と聲にいたく打たれ、兩者の間に感じてゐた疊の上の冬日は、きはだつて明るく感じられたのである。或ひは法城さんであるだけに、法悦といつたやうなものを、いくらかふりまかれるではあるまいか、とさへ思はれたのであつた。そんなところから、「あきらかになる冬日」と率直に表現したのである。

かにかくに消費を誇り夜のしぐれ

たくみなる消費者責めてゐるしぐれ

月給が昇つたの、ボーナスが幾十割であつたの、等といふことをきかせられるが、私ごとき俳人・教育者の立場にある者にとつては全く馬耳東風である。殊に聞かうともしないにもかゝはらず、何を

買ひ何を買つたといふことを、一々聞かせてくれる。しかも多く買ふことが偉くなつたものゝやうに考へてゐる人の言葉、それを素直に聞いて「ハイ、ハイ」と返事をしてゐる自分は、自らの乏しい生活と比較することなどを忘れてしまつて、却つて相手の虚を衝いてゐるではないかと、いやにおかしな氣持になつてゐることを意識する。

ものゝかけ寒ン鳴る會津旅ごころ

ふるさとの町並みであることを意識しつゝ、親しみ歩いてゐた私は、ものゝかけが寒中のことよてふと異様なうなり聲をたてるのを聴き、たちまちふるさとに來てゐることなどを忘れてしまひ、遠い遠い國に旅に來てゐるかのやうな感に襲はれたのである。

一つ星大寒に子の唄減りぬ

薄日のあるうちは子供が遊んでゐる野原。或夕方讀書に疲れた私は、戸外に出てから何気なく空を打仰いだ。大寒の空には星が一つくつきりと澄んでゐて、ひとしほ寒氣をそよるのであつた。そのとたん近所の子供達は、子供の歌を唄ひながら、一人々と露路に消えてゆく。

女ひとは山に暮るゝすべなし雪會津

猪苗代近くにての作であつたかと思ふ。山の麓に、ちらと女の動いてゐるのを見た。或ひは炭焼きの手傳ひか、それとも薪木拾ひであるかもしれない。猪苗代湖の上空は、何となく廣々と、且つ明るく思はれる。勿論磐梯の秀峰は全山に雪を冠つてゐるため、何時になつたら昏れるのかわからない。いそぐと働いてゐるらしい女の姿を見守りながら、日暮れの静かな會津に對つてゐる私であつた。

長薯いもを掘れわがふるさとのわが日向

朝起きてみたら、ちつとも風のない冬晴れである。私は口を噓いであら、足の向くまゝに家の前の畠へ出た。「好日、好日」と無音のうちに呼びながら、心足るまゝに周囲を見渡した。直ぐ近くの畑中に兄が長薯を掘つてゐるのである。私が近寄ると、とろゝ汁が好きだから……といふ兄の言葉、私は兄のあたゝかい心に打たれ、しばらくは何も言ひないでゐたが、やがて亡父ちちの長薯掘りのことなどを話合つて、いつまでも亡父の姿をゑがいてゐた。

初東風の噴井に吹かれ鳥二つ

郷家の土蔵の前に、涌々と噴き出る井(俗稱、土金水^{ドツコンスイ})がある。この眞清水は夏になると冷たく、冬になると暖いため、近所界限から毎日本を貰ひに来る。二十年振りに故郷の元朝をおろがむ私であつたが、噴井には私よりもさきに、美しい小鳥が二匹、美しい聲を立てゝ遊んでゐる。二千六百一年の大空に、美しい陸しい小鳥二匹と、おだやかなふるさとの姿が浮彫されてゆくやうに。

兵の拳大日本の初日さす

以下十句は「傷夷軍人におくる」と題し、傷病將兵慰問の心をこめて詠んだものである。かう言つただけで、句の核心が奈邊に在るかは理解されるのであるが、極めて簡単に句解を附してみたいと思ふ。陸軍病院に軒續きの吾が陋屋は、或ひは聲を掛けたり掛けられたりして、傷病兵の方々と親しくしてゐる。或る兵隊さんが「おい、初日を拜がめ」と叫んで、窓に寄り添つたときの笑顔、見れば感極まつて拳を振りかざしてゐる。そこには大日本の初日、興亞の初日が射してゐて、一瞬尊嚴なる彫刻そのものゝ姿が印象されたのである。

君ヶ代の陽炎に傷癒えんとす

病舎を取圍む原や空地からは、ゆる〜と陽炎が立ち昇つてゐる。皇國を思ふ萬民の心と自然の心

とが結び合ふところ、傷兵は明るい顔をさらしてゐるのである。

興国歌視野の冬の日さかんなれ

道を行く親と子が、興國の軍歌を合唱してゐる。わが行く野の道の、眼のとゞくかぎりは、冬の日がさんくと降り、いやが上にも今日の日本をきらめかしてゐる。

萬兩のつぶらいのちをいとしめば

傷ついた身、なか／＼癒えぬ身、併し「み民われ」の心を弛ましてはならない。病床にある萬兩の實は、假令小さい赤い珠ではあるにせよ、さながら日本精神の一象徴とも見られるではなからうか。

鳥渡り來んふるさと久遠の日

傷癒えてふるさとへ、そして以前のやうに鋏を持ち田を耕やされるやうに。さて今頃ふるさとはあなたの好きな渡り鳥が來てゐることであらうし、又山川草木ことごとく小春日が漂うてゐることであらう。

一つ手に神洲小春日まさぐられ

兩眼を失はれた兵隊さんが、あた／＼かい小六月の日光に手をさしのべて居られる。その尊い姿に思はず頭がさがり、感謝の心で胸が塞がれてしまふ。

生き生きさん新しき穹陽炎へる

たとへ身は如何ほどに傷いても、飽くまで生き抜かねばならない。神國日本の潑刺たる空には、新しい日射が流れてゐるのである。あゝ、まのあたりの徑には、陽炎がほのめき立つてゐるのだ。

短日のたゝみ遠不二あゆむなる

こんなにも日の短かい冬でありながら、軒毎に靈峰富士をおがむことが出来る。われわれは疊に坐りつゝ、富士の移りゆく姿に感謝の心をさげたい。祖國禮讚の心やまずして、この句となつたのである。

寒雀睦み合ひつゝ日移りぬ

寒雀が離ればなれにならず、むつまじさうに啼き寄り、冬の日に溶け込んでゐる光景。それを見て私は、祖國愛、同胞愛が壓縮されたものゝやうに思はれてならなかつた。

母を想ふ顔なれ秋の虹がたつ

病舎の側の道を來ると、傷病兵の方々が窓にもたれ、元氣のよい會話を交はしてゐるのであつた。ふと夕空に虹があらはれた。その虹は兵隊さんが母を偲ぶかのやうな、美はしい顔につらなつて。

萬年青の實赤したとへば父子の珠

「瀧温々氏の長男御出生を祝ふ」と前書を置いた句である。いふまでもなく前置きの句などは解説すべきでなく、句を読み且つ見てから、作者の心をくみとればよいのである。従つて自分の句ながら、作句當時の心の何分の一を傳へることが出来るか、今筆を執るにあたつて甚だ疑はしいものがある。何時ものやうに黎明の編輯に見えられた温々氏が、ペンを措いて笑顔のうちに、長男の生れたことを話されたのである。咄嗟の知せに、私は何とお慶び申上げてよいか言葉が見つからず、縁先の萬年青を凝視めた。前々からの大きな萬年青の實、そして此頃出來た小さい萬年青の實、この實の重厚な美はしさをたゞへつゝ、温々氏の芽出度き生活を祝福したのである。

ぬく／＼と小春日かさね不二の山

前書に「順天中學校・順天商業學校長松見先生の教育六十年を祝ふ」とあるやうに、松見先生は八十三歳の高齡にて今尙ほ教育に盡瘁されてゐる。此句は紀元二千六百年の祝典に際して表彰された先生へ、私のよろこびを色紙にしたゞめて贈つたものである。先生の温顔にいやが上にも輝り映ふ小春日は、さながら富士山に重なり積もる小春日の閑かさと温くさにも似てゐる。

紙鳶三つ大日本の陽にならぶ

「鈴木霞汀氏の三男御出生を祝ふ」と前書のある句で、氏が長男次男三男と続けざまに三人の男の子をもうけられたことは、何といふ素晴らしいことであらう。興亞日本の燦然たる太陽のもとに、三人のお子さんが勢ひよく、風を揚げられる圖などを畫いて、私はいつまでもよろこびの光景に浸つてゐた。

武人寒ありやなし御光がさしきたる

「株式會社金陽社々長山本魁介氏より古代武人像を贈られて」と前置した句である。この武人像には

山本氏が全精神を傾けられたもので、今これに就て語るとすれば、幾枚書いても足りないであらう。いづれ實物をお目にかける機会もあらうと思ふから、こゝにはくどくどしく書かぬことにする。恰度私が頂戴したときは極寒、直ちに著述の筆を措いて桐の箱を開け、机上に据ゑて眺めたのである。見る見るうちに、武人像にかゝはる何ものも消えてしまひ、やがて御光が射して來た。思へば憂國の士山本氏の精神が、この像に移り活きてゐるとでもいほうか。

羅漢群聲なき聲が寒に入る

以下八句は目黒の羅漢寺にての作である。この寺は立派な羅漢のあること東京一と稱せられ、國寶級のものも相當に多い。餘談になるが今日は、曾ての桂太郎の愛妾お鯉さんが、尼となつて寺を守つて居られる。この句は紫香會にての作で、法要に入る前、立竝ぶ羅漢群に對したとき、さながら佛の國に運ばれた私が、羅漢達の無聲の聲を耳にしての作である。この時私の手足はもとより、吐く息さへも凍らうとする寒氣であつた。

鬻體たゞ寒鳴りのするお經これ

この寺開基の禪師の鬻體（四五百年は経つたであらうか）に觸れながら、私達は名僧と讃へられた

禪師の事蹟を寺守りからつぎつぎと聞かせられて、頭の發達した鬻體を更に見直すのであつた。さて鬻體を前にして、禪師が書遺されたお經を披げるとき、誰讀むとなき經が寒鳴りし、私の手が小刻みにふるえ、直ちにこのやうな想を構成したのである。

冷透の雲來つ 羅漢世に構ふ

羅漢堂にある羅漢佛は、一つ一つ違つた顔容ちであり、しかも構ひまでが悉く違つてゐる。大釋迦牟尼を中心に、一つ一つの羅漢が私に相對するポーズ、それは世に何もかを暗示するやうに、毅然とした構ひ方である。假令御堂の隅から、又上の方の障子の破れから、冷え切つた風が來よう、風に交つて雲が流れ來ようと、我不關焉の眼と口元は、つひに動かうともしない。

國論はそこに羅漢等冬寝ねず

今しがたまで非常時局に就いて話し合つて來たのだが、こゝ羅漢堂に入つてみると、まるで別世界の觀がある。併し羅漢のどれもこれもが眼を開いたまゝ、界限の家から洩れるラジオの戦況に、耳を傾けてゐるものゝやうである。

大愚我が影凍たまゝか羅漢群

羅漢堂の羅漢は、いづれも一ト癖ニタ癖もありさうな顔である。それに較べると、我が身は如何におろかしく感じられることか。寒い冬日につくられた我が身の影を、羅漢達は何と見るか。私は私の影でありながらも、愛想の盡きるわびしさにおそはれた。

空凍てゝもつれん羅漢下々向きに

地上にある、ものといふものはすつかり凍てゝゐるが、やがては空までも凍てゝしまひさうな酷寒である。よくみると、空が凍てゝもつれさうな氣配である。されども羅漢は身一つ動かさず、ぢつと下を凝視したまゝである。その雰圍氣には、凜然たる律動さへ聽かれではなからうか。

血書經に冴え返る我がこだまなれ

開基の名禪師が自分の血を絞つて書いたといふお經一卷、これは門外不出のものであつたが、特にわれわれに見せられたのである。所謂血書經に非ず、眞の血書經であるため、その文字と血の色の迫力には、我ながらためらふのであつた。私はつきつきと黙讀したが、無意識に洩れる嘆聲のみがおり

おりこだまとなり、異様に冴え返つてくるのに驚かされた。

羅漢みな西向くまゝに春はやき

東の座に立竝んだ羅漢群は、一様に西方淨土を眺めてゐる。時折冬の日は、ひとしほの明るさを帯びて、堂内に射し込むのであるが、なかなか春は來ようともしない。屹度羅漢達は春を待つてゐるのであらうが。

壁畫たゞ山に老い入り冴え返る

この壁畫は佛像畫である。春なほ寒き日、山に向いたまゝの壁畫を眺めると、いたましくも陽に風にむしばまれてゐて、見るに堪へかねるやうな淋しさを感じた。出來ることなら私の身體を以て、風を避けるやう、又太陽の光りを遮ぎつてもやりたいくらいであるが。心のない山寺の僧をうとみつゝしばらく冴え返る壁畫を賞讚し、かばつてやりたい氣持で一杯であつた。

子雀の空あればあれ盧舍那佛

盧舍那佛の前には、何時まで居ても居飽きることを知らない私である。空には何も知らない子雀が

ちよと鳴き戯れてゐるらしい。それでいよのだ、慈悲の庵舎那佛は何もとがめはしないのだから。

雪ぼくり童の言葉散るひかり

以下五句には「雪の會津を去る」の前書を置いてある。二月の墓参に雪の會津へ来て、一泊の上歸京した。そのとき雪の中を歩いてものした句である。ぼそぼそした雪を踏みつけて、會津の子供は日がな遊び戯れてゐる。雪に生れ雪を友とする子供は、雪を見るなり潑刺とした言葉を地上に散らしてゐる。その元氣のよい言葉に呼應してか、冬の陽は賑やかに光り合ふのである。私はいつしか自分が子供であつた頃を思ひ出して、雪と童とに眼を注いでゐた。

雪は雪にひかり郷愁ほとびるを

上京の途にある私は、山より凩す雪風のきらきら光る光景を眺めて、恰度兩親に呼びかけられたやうに會津が戀しくなり、再び會津へ戻りたい心に驅られたのである。目をつぶれば、兄の聲、嫂の聲、妹の聲、そして兄の子達の聲や親しい人々の聲などが入り混つて、美しい合唱のやうにさへ聴えてくる。

雪入道おどろ墓の字うごくうごく

木に石に雪が積り重つて、一見入道のやうに見える。墓参りに来て、墓の雪を拂ひ除けてみると、墓石の文字は日暮れの風に誘はれてか、ゆらゆらと動くやうである。見るもの悉く雪で、眞つ白であるにもかゝらず、我ながら戦慄を覚えるのである。

氷柱とけかゝりうからの饒舌や

軒の氷柱がとけかゝり、ぼとりぼとりと雪の垂れる音の聞えるころは、晝餉近いせいか、家中が非常に賑やかになり、それに親類の人や近所の人なども見えるので、一入和やかな笑聲がする。私は座敷などに居て讀書をしつゝ、かうした雰圍氣をまのあたりにしては、時折雪國でない人を氣の毒に思ふことがある。

石童子山に背いて春を待つ

石で造られた子供の像が幾つも境内に立ち並んでゐる。或ひは着物を被たのも、前垂を掛けたのも、或ひは菓子などを持ったのもある。みんな雪の山を背負ひながら、顔にはあたゝかい日をほしい

まゝにして、春の來るのを待つてゐる。

窓に時ながれ梅の花欲りつゝも

梅の花を欲りつゝ、窓には時が流れてゆくといふのである。家にふさはしい窓、窓の奥にはその家にふさはしい人がゐて、窓の外の梅の咲かうとするのを待つてゐるものゝやうである。

耶蘇の墓子雀空をながれくる

淺草清島町の某寺にての作である。キリスト教排撃の今日、この大きな耶蘇の墓には、絶えずいぎたない言葉が浴びせかけられる。私も足で蹴飛ばしたい氣持で、この墓の英文を読んだ。そのときこの墓をあざわらふやうに、幾匹かの子雀が鳴き翔んで來たのである。

鐘おぼろそゝと一枚むかしの繪

「葛飾北齋追善法要」と前置した句である。北齋供養のお經があげられ、打ち鳴らす鐘がおぼろに響きわたつてくる。私達は北齋の墓へ参り、又寺へ戻つて來た。澤山竝べられた北齋の繪のうち、一枚だけが妙に私の心を捉へて離れない。供養によつて益、此の繪が活きたやうにも思はれ、私は幾度と

なく此の繪の前に立つて、北齋を偲んだのである。

鳴る羊齒しんたの冬の日はやく滅びるか

以下七句は「伊豆大島」と前書を置いた句である。三原山より颯す風に、地上の羊齒の葉はさやさやと無氣味な音をたてる、そのまとまりのない音は、さながら大自然を呪ふかのやうに。今しがたまで羊齒の葉に愉しんでゐた冬の日光は、忽ち打ち滅ぼされてしまつたものゝやうに、あはれあとかたさへも見せてくれない。一しゆんにして、すべては太古の明暗にさらされてしまふといふのか。

原始林噴煙冬をあこたらず

原始林は原始林ながら島の靜寂に馴れ、無聊なる冬を如何とも出來ず、たゞたゞ眠つて居るのではないかとさへ思はれる。それにもかゝはらず、原始林の上方に聳える三原山は、この冬空に間斷なく煙りを吐いてゐる、或時は黒い煙を、或時は火の混つた煙を。見れば見るほどせはしなく、うるさく。

御神火へ歩々羊齒群の鳴る寒さ

御神火めざして歩を運ぶ道すがら、群がる羊齒の葉は私のために頼に大きな音を立て、一としきり

朝の寒さを感じさせる。私は一心にあの神秘的な御神火へ近づかうとしてゐるのだが、羊齒群はそれを遮ぎらうとするのか。私は御神火を疑ひ、羊齒群を疑ひ、そして遂に自分自身を疑ひながら、たよりない足を運んでゆくのである。

花椿島たゞならぬ御光さす

御休處として有名な歌茶屋にての作であつたか、とにかく見晴しの佳いところに佇つて、島の海岸を瞰下したときの句である。純情な島の乙女が物思ひにふけつて佇んでゐるやうに、椿の花が美はしく点在してゐる。其處へ富士山らしい山からの朝日が射し込んで来た。すると椿の葉もさることながら、椿の花の美はしさは一段と際立ち、まつたく夢ではあるまいかと思はれる御光に、すつかり融け合つてしまひ、私はたちどころに羽化登仙の境に誘ひ込まれたのである。

島の道雲にまぎれて日短かさ

岩角へどつかと腰を下ろし、今来た山道を遙かに見下ろすと、雲の去來はひとしほはげしく、忽ちに道が見えなくなつてしまふ。何となく心細いことである。このまゝに島には雲が壓しかぶさつてしまふではあるまいかと考へられる。顔を上げて空の彼方を見遣ると、太陽も大分傾いたといふのか

薄い日さしには暮情をたゞよはせてゐるのである。

濱の火に墮つ空なれば鴨來たり

寒々とした島の海岸では、焚火をしてゐる。年寄二人のところへ、一人寄り二人寄り、若い衆も亦島娘も来てあたゝまつてゐるやうだ。どんよりと曇つた空は、今にも焚火の人々へかぶさりさうである。丘の樹に啼いてゐたらしい鴨の聲も聞えなくなつたが、よくみると焚火のそばへ移つて來たらしい。鴨も寒さを厭ひ、暗い空を嫌がつて來たものであらうか。

初不二のせまればアンコ唄ながす

元日、靈峰富士の偉容がくつきりと浮かんで來た。私は大島三原館のベランダに出でて、飽かず眺めてゐた。時の經つにつれて富士山は、段々とその島へ迫つてくる。美しい富士山を見つけ出した島娘達は、美しい面ヲを富士へ向けて、他愛ない唄を合唱し始めたのである。

けものゝ眼わがさが見れぬ日短かさ

東京市設自然動物園にての作である。こゝは御承知の方もあらうが、動物を自然の儘に飼ひ放して

あるので、さながら山野に棲息してゐると同様に、のびのびとしてゐる。この句は、多分狐か狸を對象にした作であつたと思ふ。人をだますといはれる狡猾な動物でありながら、その眼はどことなく間が抜けてゐて、自分の性さへ知らぬといふ風である。あはれなそのけものは、日暮れを知つてかどうか、餌をあさらうとした眼つきを見せてゐる。

波浮の星めをと星なれ初がすみ

この句と次の句は、波浮港にての作である。普段はいさ知らず、私の接した正月の波浮港は、桃源郷そのものゝ感があつた。老いも若きも睦しく、或ひは山道を下りて波浮に現れ、或ひは山道を登つて姿を消すといふやうな風景。ときに初霞の中に、大きな星が二つ光つて見える、あれは波浮の夫婦星であらうか。

飾海老アノコ等海の日をかざす

村の軒々には飾海老を供へてある。流石に平和な島の正月である、島の娘達には屈托する何ものもなく、はちきれぬやうな青春に、海に映える日光を讚美してゐる。

初鴉お吉の墓に鳴き足らふ
お吉墓蝶凍てゝゐる運命か

「下田唐人お吉の墓」と前置した句である。ひつきりなしに鴉が啼いてゐるが、お吉の悲運を慰めようとしてゐるのか。鴉よ、啼けるだけ啼いてくれたらいい。お吉の墓を見ると、そこには蝶が凍てゝゐた。お吉も亦この蝶も、運命の拙さを歎いても仕様のないことだ。運命を甘受してこそ浮かばれよう。

青い落海のはたらきたゝみ來る

前書に「伊豆雁島」と置いた句で、この雁島は伊豆下田港にある小さい美しい島である。私が雁島を訪れたのは正月であつたが、これでも一月かと思はれる程のあたゝかさであり、島の岩には一面青とした蔭が生えてゐた。昨日までの忙はしさをすっかり忘れてゐる私に、おほらかな海原から明るい、そして潑刺とした波音がどどと打ち寄せてくる。その度毎に青い蔭はいよいよ青く、可憐な姿になるのである。

人は人鶴は山までの晴れ

この句以下十四句は、池中紫雨氏に誘はれて修禪寺温泉へ行つた折の作である。窓を開けると、さながら理想郷にも似たる朝の光景である。松は朝の寒さに葉を揃へて一入の静かさを保ち、崖下の溪流は魂をゆすぶるやうな清い音をたてゝをる。ふとみれば其處此處には修禪寺の乙女たちが物を濯いでゐるらしい。くつきりと朝の日が射した道には、手拭を肩にした湯治客が二人三人づつうごいてゐる。私の目の前にあらはれた鶴は、盛んに枝移りをしつゝうるはしい朝の聲を散らしてゐたが、たちまち山の上までも朝の日は遣え上つて行つた。

石たゝき伊豆しのゝめの乙女欲る

早朝の溪谷からは霧と靄とが立ちのぼり、いよいよ白さを加へて、山の容ちもあらはれようとしてゐる。川底にはしきりと石叩が鳴く、おそらくは物濯ぎの美しい娘さんに呼びかける聲であらうか。石叩の聲に招かれて川へ出る清楚な乙女たち。

湯げむりはさてこそ松の實のひなた

湯壺から立ち昇る湯げむりは、見るからにあたゝかさうであるが、しかしそれは恰もうたかたのやうに、松の木にとゞくころには消えてしまふ。松の木は何と可愛い松の實をつけて居ることか。しかも數多の松の實は、この美しい日向をほしまゝにしてゐるのである。それはいふまでもなく、あたゝかい湯げむりに包まれ、まもられてゐるからこそ、思ふさまに膨れてゐるのであらう。

伊豆われに一重二重の雲ぬくま

あたゝかい伊豆とは思つてゐたものゝ、びゆうびゆうと空つ風が吹いてくると、たちまち肌身が冷えてしまふ。紫雨氏と私は次から次へと歩き廻り、探勝に餘念がない。不圖あたゝかさうな雲を見つけて、伊豆の雲は暖かい、そして美しい」と思はず欣んだのである。見る見るうちに一重の雲は二重になり、風も漸くおさまり、見渡すかぎり銀色の光線が漲つて來た。

鴉二つ修善寺の春うらなへる

この修善寺は見たところ平和であるが、自然は自然とし、人間は人間として季節の輪を廻つてゐる。禪利修禪寺の僧侶が巧みな舵を採つて呉れるのか、いやさうではあるまい。修禪寺の老松の上には、さつきから鴉が鳴いてゐる。あの夫婦鴉が修善寺の春を占つてくれてゐるやうな氣がしてならない。

寒鴉修善寺の鐘にはづむまゝ

修善寺の朝は修禪寺の鐘の音に始まるといつてよいから、鐘の音が素晴らしい。勿論鐘そのものもよいであらうが、地勢の関係上鐘の聲が好もしく聞かれるといふこともいへるであらう。私は鐘の音に心奪はれてしばらく呆然としてゐたが、寒鴉が一つ二つとあらはれ、遂に四五匹になつたであらうか、それらが鐘の音に弾むまゝに鳴き會ふ聲を聞いて、一入旅のこゝろをいためたのである。

石たゞき山をひろげて極く小さき

たとへば仙人が素朴な手法をもつて、彩管を揮つたやうな畫面といはうか、稚拙の中に纏まりがあり、しかも活きた光景であるがため、私はこゝに心惹かれて一句をものしたのである。すなはち石たゞきは冬晴れの朝を我もの顔に、精一杯美しい聲を傾けて鳴いてゐる。石たゞきの後ろの小さい山は石たゞきの美しい聲のためであらうか、あたゞかい朝の陽をうけながら、段々と擴がつて來たやうである。

鐘を聞けつたなき婢など寒に入る

出し抜けに修善寺温泉へ來た紫雨氏と私、普通の旅館なら幾らも空いたところがあらうに、一流旅館へと交渉したため、とんでもない目に逢はされた。即ち三階の寒い部屋、滅多に使はぬといふ部屋へ通されたのである。寒い寒い、いくら火鉢に火を起しても寒い。従つて熱燗も容易に利かぬといふ始末。又驚いたことには、この大旅館には珍らしい氣の利かぬ女中が酒を運び肴を運ぶ。たゞし静夜に玲瓏な音を響かす修禪寺の鐘だけが見つけものか。無愛想な、不造な女中が障子を指して、修禪寺の鐘を説明してくれたが、本人は鐘の音を一向感じないらしく、ぼんやり坐つたまゝ、寒に入るのだから寒いなど言つてるだけである。

春山光走り湯の壺うたかたに

これは獨鈷の靈泉にての作である。現在川の中に見えるこの獨鈷の湯は、大同二年弘法大師が発見になつたものと傳へられてゐる。今、殷賑を極める温泉街の大厦高樓をまのあたりにして、しばらくの間湯壺を凝視すると山光が來ては直ちに去り、あとからあとからと、うたかたが生れるだけである。

鐘ひゞく力は更に松葉落つ

何といふいゝ鐘の聲だらう、これで修善寺へ來た甲斐がある、などと話し合ひながら、鐘の聲に誘

はれて修禪寺の境内へ来た。ゴーンと鳴りひびく鐘の聲は次第にこよない妙音となりつゝ、朝の蒼穹へひろがつてゆく。ふと目の前の古松からは、鐘の音と朝の光に押されてか、松の葉がさゝつと落ちて来た。

修善寺の鐘寒しの石を木を研ぐか

深更、修禪寺から流れてくる鐘の聲に魅せられ、庭や溪石を見渡したときの印象、詩素といふべきか、それは恰も寒中の石や木を研ぎすすために迫るところの、鋭利な刃物のやうに感じられる鐘の聲であつた。

梵鐘は男松女松の倚るぬくさ

修禪寺の鐘の聲は遠くに居てきいても、はつと驚くほど美しい響きである。自然修禪寺の鐘の魅力を確認したいなどと考へてゐたせいもあらうか、私と紫雨氏は山から風す冷い風を厭はず、朝の日向を拾ひながら、修禪寺の門扉へあらはれ、さうして數々の歴史を包む本堂を打眺めたのである。折しも鐘が鳴り出したので、今更のやうに左手にある大鐘樓に目を移し、さながら美しい夢に誘ひ込まれるやうに、うつとりと鐘の音色に聞き入つた。ふと目を上げるとまのあたりなる男松と女松の大木は澄

みきつた日射と鐘の聲とをほしきまゝにして、互に睦み合つてゐるかのごとくに見えたのである。

岩かげの春かげはなし獨鈷の湯

獨鈷の湯に佇んでゐると、一千年といふやうな長い時の流れが、目睫の自然の動靜とよもに、再び未來へつくられてゆくやうで、ぎくりとわが足もとを見直すことさへある。この獨鈷の湯には春夏秋冬もなからうと思はれるが、そこらあたりの河原石の表テは悉く日向に恵まれて、春らしい氣配を孕んでゐる。しかし大石の影はどれもこれももうすぐらく、山の冷たさに見舞はれてゐるかのやうに見える。

松の實は落つ青春をかへりみる

ぼたりと松の實が落ちた。見上げると相當大きい木であり、まだ青々とした松葉を一杯蓄へてゐる。とたんに私は考へるともなく、生の疲勞を感じたやうな氣がした。徑を行くほどに私は、私自身始終若さにあふれてゐると思つてゐるにもかゝらず、地上にひきずる自分の影などともよもに、何時の間にか若さを減らしてゐるのではあるまいか、などと考へて、思はず自分の影を睨みつけてみるのであつた。

身の寒さ墓にいふだけ空青さ

この句は征夷大將軍源頼家卿の墓へ詣でた時詠んだものである。この時の空つ風の物凄さと寒さは、今もまさしくと思ひ出されるくらゐひどいものであつた。喬杉と竹林は間断なく異様な唸りを立て、その激しい風の聲ととも寒さは身を刺すのである。二重廻しをぎゆつとおさへつけてゐても、風の冷たさは胸・腹・腿と用捨なく全身を刺すので、實に居ても立つてもをられぬといふ言葉そのまゝであつた。折角お墓参りに來たのであるから、墓の裏へ廻つて彫み込まれてある文字を讀んだのであるが、一字讀む毎に只寒い寒いと、寒さを口に出して言ふ。つひ寒風を怨めば、大空は愈々青さを増してゆくかのやうに思はれる。

梅ひらくらしい光芒われはやす

中山夕馨氏から次女が生れたといふことを聞いて、慶びのあまりお祝ひ申上げた句である。梅を好まれるらしい夕馨氏は、部屋に梅の鉢を置いて、次女の初聲を聞かれたことであらう。そのとき梅に射し込んで來た日光に、心からなる歡びを感じられたに相違ない。そんなことを想像して、私も梅の苔に射し込んで來た早春の光芒にむかつて、實にお芽出度いことだ、とお祝ひの心を湛へたのである。

る。

水仙花いのち二つにふれて咲く

この句には「清水瓢太郎氏の御結婚を祝ふ」と前書があるやうに、瓢太郎氏の新生活を慶賀したのである。瓢太郎氏は軍醫學校時代しばしば拙宅を訪られたので、氏が拙宅近くのアパートへ引越された時、防空演習の夜一度訪問したことがある。堂々たる體格、確かに病氣の方が遠慮してしまひさうな隆々たる身體である。一見、この人が俳句を愛好されるとは、意外な感に打たれた方もあることと思ふ。

令園筑紫女氏は短歌に堪能な方であつたが、瓢太郎氏のすゝめによつて俳句に精進されることになつたらしい、以前は郷里佐賀から、其後東京・北滿から、上品な佳吟を寄せられてゐるので、夫妻の句に就ては誰一人知らぬ人がない。巢鳩氏はかつて、瓢太郎氏よりも奥さんの方が上手になりはせぬか、などと言はれたことさへもある。

私は瓢太郎氏と奥さんが机上に水仙の鉢を据えて、共に句話や句作に耽けられるとき、その水仙が二人の心にふれて美しく咲き出で、二人のために以前より以上佳い句を生んでくれることであらう、と祝意を披瀝してこの句をものしたのである。

玉樟の奥の光明春來らし

この句と次の句は、房州小湊の誕生寺にて詠んだものである。小湊の誕生寺については今更私が説明を費すまでもなく、日蓮の誕生寺として世間周知のことである。私がこの寺を訪れたのは二月の末であつたらうか、山には多少残雪も見られたが、日の溜まる海岸べりは可成りの暖かさを漂はしてゐたやうである。

大きな山門を潜つて山道を行く程に、玉樟が潤色を湛へて、一入幽寂の氣を秘めてゐるのであつた。私はしばらく足をとどめて、聖日蓮の再來を夢みるかのやうに、玉樟のさゝやきをきいてゐた。さうしてゐるとき、私の希求が實現したのか、玉樟の奥の方からほのぼのと明るい光り、それはさながら法悦の光りにも似たる早春の光りが見とゞけられたのである。

潮鳴りや山鳴り春の佛立つ

誕生寺の境内に立つてゐると、四方から日蓮が歩み寄るやうに感じられ、又四方から日蓮の説法がきこえるやうに感じられる。これはいけない、私をつゝむ現實が消えてゆくではないか、と意識した折である。目の下の海からどとうと潮の打寄せる音が、手にとるやうに快いリズムをもつてせまり、

それかあらぬか本堂の上の山からは、早春を告げるやうな山鳴りがふれて来た。この軽快な、あたゝかさうなりズムに押されて私が行かうとすると、目の前の木立の中には日蓮の聖像が立つてゐるのである。

春ははや海貫いて鯛ふやす

小湊鯛の浦にてもものしたるもの、こゝは鯛の浦と名づけられてゐるやうに、大きい鯛小さい鯛が一杯泳いでゐるところ。しかしこのときはうすら寒い日でもあり、又曇り勝ちの天候であつたため、或ひは鯛が出て来ぬかもしれないといふ船頭の話。船の中からしばらく海中を覗き込んでゐると、底の方に大きな鯛の泳ぐのが見え、續いて小さい鯛も次々とあらはれて来たのである。やがて春の日がきらきらと波を貫いてかゞやき、海底の鯛も春に酔ふかのやうに見えて来た。

鯛小鯛春にこたへていとまなし

前につゞく句である。大きい鯛小さい鯛も群をなしてあらはれ、各々春をほしいまゝにして遊べるさまは、さながら海中の極楽圖のやうでもある。春を讃へてゐる私のこゝろは、いまにも海中の鯛に通ふではあるまいか。

海の碧鯛は春晝かざれるか

何時であらうと、春の海は碧くて美しいものであるが、春の晝は殊の外に碧さも濃いせいか、際立つて美しく見える。しかも鯛の名所である鯛の浦であるから、その碧さと美しさは言葉以上のものである。ちつと海を透かしてみていると、さながら海の理想郷に招待されてゐるやうな感じさへするものである。

きつゝきは清澄山の陽を落とす

早春の安房清澄山はまるでおいてけぼりをされたやうに、まだ雪さへ残つてゐるところもある。それにもかゝらず善男善女は春先きの陽をたのしみながら、せつせと山へ登つてゆく。時折啄木鳥が木を叩いては、参詣の人々を打驚かす。人を馬鹿にしたやうな啄木鳥の聲にさそはれて、山は一入寂びを加へてゆくのであるが、その啄木鳥の姿を見出さうとすると、こつこつと木を叩く音につれて、またゝくまに木々の陽光がうすれてゆくのである。

てらつゝき日輪山の寂びたゝけ

清澄山の日輪、それをおがむだけでもありがたいけれども、啄木鳥が山の木々をこつこつと叩いてくれる音をきくと、更に清澄山の幽玄が身に迫つてくる。啄木鳥よ、私よりもつと離れ、山の奥へ行つてから老木を叩いてくれ、さうすれば清澄山の寂びがいよいよ加はるではないか。

墓の苔凍てるひゞきと住み慣れん

修善寺の竹を友として竹を彫り、更に名利を求めようともせず、寒風に微笑してゐる風狂の人、私はふと芭蕉の句「こがらしの身は竹齋に似たるかな」を思ひ出した。私に源頼家卿の墓を、親切に教へて呉れたのもその人である。この句はその折の句で、頼家卿の墓の苔がしんしんと凍てるのに、その寒さを厭ふ顔さへ見せず、墓を守つてゐる親爺の姿を詠んだのである。

蒼穹は虚空猫の眼春めける

青空を眺めてゐると何のことはない、たゞの空である。不圖私はものゝ怪に憑かれた心が、急にほぐれたやうな氣安さのうちに、一匹の猫を見つけたのである。その猫の眼の澄んでゐること、そして麗かなこと、たちまち私はもう春である、と心に叫んで無精にうれしくなつた。

陽炎に壁畫傲りてほろびつゝ

ゆらゆらと立つ陽炎に、今まで沈黙してゐた壁畫が俄かに勢ひづき、生氣ある態容を構へたのである。しかし風霜とたゞかひぬいてきた壁畫であるゆゑ、どことなく疲れた姿を見せてゐる。それは自然に抵抗してきた疲れであらうか、可惜敗北の形相と色彩が見うけられるのである。たゞ私は壁畫が誇るその寂びを、何時までも愛してゐたいのであるが、大自然がもたらす陽炎の美しさに壓倒されてか、巧の力や美しさといふものが、あまりにも小さいものであることを見せつけられて、いさゝか呆氣にとられたやうなわけである。

壁の双龍それ陽炎とたゞかへる

壁畫の龍、それは永いこと風雨と相對してゐたせい、背と云はず尻尾と云はず、ところどころ色が剥げ、形さへも消えかゝつてゐる。一見するところ、眠つてゐるといふよりは、死にかゝつてゐるといつた方が適切であるかもしれない。私はぢつとその龍を眺めてゐた。そのときである、今迄眠つてゐたやうな雌雄二匹の龍が、むらむらと起きあがり、虚空へ抜け出ようとする態勢をとつたのである。それは何ぞ計らん、目のあたりに炎え上つた陽炎に對して、二匹の龍が頭をもたげ、挑みかゝら

うとしたゞめである。

男湯はときに桐の實つたなくて

この句は「會津熱鹽温泉」にての作である。私は三月の休暇に歸省中、父（この年に父は死亡した）を伴つてこの温泉へ來た。會津盆地は早春の氣が漲つてゐるのに、熱鹽温泉は根雪が未だに消えず、従つて春近かるべしの感じも起らない。私は父にうまい酒を飲んで貰ひ、好きなものを食べて貰ひ、さうして悠つくりと湯に浸つて貰へばよいのだから、閑靜な旅館を求めて這入つた。流石田舎の御婦人連中は忙はしくないものと思はれて、女湯の方は相當な賑やかさであるが、それに引きかへ男湯は、父と私との二人切りである。朴訥そのものゝ父は、何も言はず、何も聞えぬといつた顔をして、たゞ硝子窓に映る桐の實を眺めてゐるだけである。このとき私は、土に生きる父の性格に添ふ會津の連山と、桐の實を見て、堪らないよろこびを感じたのである。

早春の野ぶりふるさとその野ぶり

野は一樣に早春を待ちあぐんでゐたものか、早春を讃へる色に充ち、早春を讃へる韻に満ちてゐる。勿論家郷が近くなつたといふ感じを得てから、野や山に對する親しみは一入増したのであるが、いよ

いよわがふるさどに入つたと感じた途端、野の木、家、土、橋、川等々はお辭儀をして私を迎へて呉れるかのやうに付き纏うてくるのである。私も一々目禮して、一呼吸毎に少年の日の美しい夢をひろげてゆくのであつた。

上京の巢塙氏と日比谷公園にて

句を乞へり旅に芽柳ほぐるゝに

私と巢塙氏は、市街の雑沓を避けて日比谷公園に入り、椅子に腰を下してから、或ひは句を語り、或ひは句を作つた。二人は句帳をひろげたまゝ、つぎつぎと句を記してゆく。約半時間の句作、果して佳吟が得られたかどうか。今日の收穫を句會へ出句するわけでもないのだが、といつてお互に句を見せ合ふともしない。そろそろと歩き出してから、私は熊本からはるばる上京中の巢塙氏、即ち旅人である巢塙氏に、旅の印象句を是非共見せて貰ひたい氣がした。日比谷の樹木はたをやかに芽を吹いて、さながら巢塙氏の旅愁を慰めてゐるかのやうにも見えるのである。

白き夜の春の譜ながれ旅人なれ

この句も前句に續くもの、即ち巢塙氏歡迎の茶房にてものでした句である。宴果てゝなほ巢塙氏との

別離を惜しんだ吾々黎明の俳人は、或る茶房に入つて句を作ることゝなつた。句作のひとつ、銀座の夜の底からは、弛やかに春を奏でる樂の音が浮かび上つてくる。そこに旅人なる巢塙氏のポーズが鮮やかに彫られてゆく。こゝにかもし出された和氣霽々たる雰圍氣は、何時までも黎明人の頭を領して離れないであらう。

示現寺に源翁和尚を偲ぶ

源翁は常世に山の雪解くる

會津なる熱鹽村の示現寺に至り、寶物殿を拜觀して得たる句である。こゝでは名僧源翁に就て詳しく云はぬが、名利現示寺の今日あるは、實に源翁和尚のお蔭である。私は父とゝもにこの寺に入り、住持より親しく源翁和尚の事蹟を聞き、且つ種々なる遺物をも見せて貰つた。私等は何處の部屋へ案内されても、源翁和尚が今猶ほ生きて居るやうに思はれ、今にも嚴しい喝が迫つてくるやうな氣がしてならない。さてさうは思ふものゝ、目の前の山々には午後の陽があたつて、次第に雪が解けかゝり淡い春の息吹きが聞えてくる。源翁は何處に居て早春の山を見、早春の音を聞いて居られるか。

松ぬくし父子の面輪が通ふべし

磯ヶ谷紫江氏が亡父の十年祭を営まると聞いてものした句である。その折私はこの句の外に「十年の梅の明るさ句を捧ぐ」「仰ぎたる星に父おもふあたゝかさ」「木瓜供ふ奥津城の上雲遊ぶ」の句も作つたやうに記憶してゐる。紫江氏の御先考が神去りまして十年、親孝行の氏は追悼の情を籠めて「惜春帖」と題する追悼帖を編まれたのである。私はあの佛のやうな慈顔の紫江氏が亡父の靈に呼びかけられる孝心に打たれ、直ちに磯ヶ谷稻荷神社の松のあたゝかさにも觸れることが出来たのである。

一塊のわが身陽炎ふ水ながれ

「井頭公園」にての作である。いふまでもなく吾が身のはかなさを省みたときの自懐にして、六尺に近い吾が身のかたまりも、陽炎に對しては何のその、陽炎に弄ばされる形骸に過ぎないものであり、更に又川岸に佇めば流れる水に弄ばされる淡い影に過ぎないのである。つまり我が身といひ、陽炎といひ、流れる水といひ、ともに同じやうな運命に置かれてあるではなからうか。

純乎われ教場の春を傷けず

學生は百人百色、或ひは憂鬱な相を、或ひは陰險な相を具へてゐるやうに見られるのもあるが、しかし青少年は青少年としての純粹性を具へてゐるので、見方によつては實に神にも近く、又は佛にも

近いやうに感じられるのである。學を説く私は窓からうらゝかな春光の忍び入るまゝ、さながら聖者の如き心境を求めつゝ、一時間の授業を済ますことにしてゐる。教場の春、そこは教師對生徒の尊嚴侵すべからざる精神道場であらねばならぬ。

叱責のあとあらはるゝたゞ春日

神聖なるべき教室に於て、後ろを向いたり、隣りの者と話し合つたり、又は其の授業以外の教科書などを披けてゐたりすると、遂に叱つつもりではなくても叱つてしまふ。さうしてから講義を續けながらも、自分の徳の至らざることを泌々と反省するのである。殊に春の日影がさんくんと射すやうなときには、自分の不徳なる性格が春日に見透がされたやうな氣がして、一入恥ぢ入るのである。

尼ひとり木魚がたえず木瓜咲かす

尼の清淨なる姿と心、それに呼應してか、木魚はポクンポクンと音をたてゝやまず、さゝやかなる庭の木瓜までがそれにさそはれて、或ひは白い或ひは赤い花を咲かせてゐるのである。かやうに尼・木魚・木瓜の三者が交叉する一點に佇つた私は、次第々々に法の世界、未だ夢想だにもしなかつた法悦の境を遊歩することが出来たのである。

君の歩が空へ向へば若葉それ

この句には、「池下辰二郎氏早大評議員となる」の前書を置いてある。つまりお祝ひの句であるから、第三者は一讀後、直ちに句心に觸れることが出来るであらうと思ふ。作者なる私がこの句を理解して貰はふと思つて解釋すれば、却つておかしなものになつてしまふ。何故ならば冗漫なるお世辭が出来ないからこそ、祝意が結晶してこの句を成したのである。従つて第三者は一讀再讀、作者の心に觸れ、そこに膨脹する祝意を掬みとればよいのである。ともあれ敢て數言を費してみることにしよう。池下氏の重厚なる人物は、見れば見るほど判然とその足取にもあらはれ、遂にその抱負に應へるかの如くに、木々の若葉は愈々色増して、輝かしさを放つてゐるのである。

水滔々つばめはかなきものに觸れ

鬼怒川温泉山本館の三階より鬼怒川を望んだとき、さながら電光の如くに私の頭に閃めた感情である。華美を盡し淫蕩を極めた人間生活の様相が、或ひは頹廢的な丹前の模様に、或ひは遊女の濃艶なる笑聲に、或ひは魅惑的なる建築美に、まるで走馬燈のそれにも似て色とりどりめまぐるしく追つてくる。併し目をしばたゝいて崖の底を眺めると、其處には太古さながらの水の碧が見出される。やが

て雑音が消えてしまふと、私の耳には滔々と流れる水の音だけが聞えてくる。よく見れば翠簪を慕つて來た燕であらうか、鬼怒川温泉の雰圍氣をふるひ落とすかのやうに、ひらひらと身を反して翔んでゆく。

體感をもてあそぶかに夏來たり

人一倍虚弱な私は、一寸した寒さ、例へば夕風がひえびえすると思ふ途端に風邪を引き、又朝の洗顔などに於て水に手を入れ、今朝は寒いやうだと思ふ途端に風邪を引き、それから今日は温か過ぎると思ふや、無精に汗をかいて苦しくなつてしまふのである。かやうなわけで五月六月の候は、寒暖兩様に苦しめられ、或ひは家に居るにしても、或ひは外を歩くにしても、神経がいらいらして因り、自分の身ながら自分をもてあましてしまふことが多い。この句はいふまでもなく、昨日今日までは春ともつかず、夏ともつかず、氣候を疑ひ且つ氣候に對して躊躇してゐたのであるが、只今始めて夏が來たといふ感じを得ることが出來たと、ほつとしたよろこびを句におさめたのである。

毛蟲洒然と生きる乙女等愛情に

私は或る人を訪問しようとして、郊外のとある小路に這入つた。其處には童達が遊んでゐたので、

直ぐに尋ねる家を問うた。このとき大きな縦の木の下にゐた私は、足元にむくむくと毛蟲の這つてゐるのを見た。その憎らしい毛蟲は毛を總立にしたまゝ、しやあしやあと私の方へ這え寄つて来る。私は殊に毛蟲が嫌ひなせい、這つてゆく姿を見まもるにつれ、いよいよ憎惡の念を燃やしたのである。殺してやらうか、そのままに放つて置かうか、思案するともなく目を反したときに、大きな邸宅の門から美しい乙女達が出て來た。美と醜の極端といはうか、餘りにも對蹠的な存在に、私は呆然とした美しい乙女達は美しい愛情を求めて生きてゐるのに、この毛蟲は私の憎惡を全身に浴びて、しやあしやあと生きてゐるのである。

百人の一人叱り春あはたゞし

日本精神、會津精神、白虎精神をと、間斷なく精神教育を説き、學校の使命は學問よりも精神にあると力説して、學生に氣魄あることを要望する私である。そこで學生に氣の弛むところがあれば、長歎息して學生を叱責する。そのときの私の言葉は、いふまでもなく私の血と肉のかたまりである以外何ものでもない。それだけに叱つたあとの心身の疲労は譬へようもない。百人の中の只一人ではあるが、私の期待と相反した行爲に觸れたときの苦痛は、何によつても慰められることが出來ず、たゞたゞ心の中で泣くだけである。それゆゑにまろく、ぬく、平らかなるべき春が亂れ亂れて、歪んで

感じられるのを如何ともすることが出來ない。これも私の拙い人生に於ける一つの波紋であるかもしれない。

(附記) この句解篇は私の俳句集「會津」に掲載されてゐる俳句の中から約一百句を抄出し、それに句解を附したものである。或ひは見方によつては、句解といふよりは寧ろ鑑賞に傾いた嫌ひがあるかもしれない。併しそれは私の俳句をよりよく理解して貰ふため、つまり俳句の精神、俳句の形式、境地、着眼、構想、技巧、言葉や文字の使ひ方生し方等を充分に會得されるやう、心を配つて執筆したためであることを諒とされたい。

句

評

篇

附記

こゝに採録したる句は、あながち粒選りの名句であるといふわけのものではない。私が諸雑誌の選句に際してその優秀句、或ひは入賞句などを評した場合のものも、若干この中に加へてある。併し大體に於ては、新しく筆を執つたものが多いといつてもよろしからう。

特に「句評篇」として、大袈裟に取扱つた所以のものは他でもない。過去十数年の間、私は幾度句評の仕方を質問されたかしのれない。殊に入選句などに對してはどんな評を下せばよいのか、参考書らしいものがあるかどうか、などと熱心に問合せられることもあつた。又或人からは句評の仕方とそれが例句を集めて、一書を編んで欲しいとまで懇望されたのであつた。思ふにかうした希望を持つて居られる俳人も、決して尠くはないであらう。果してそれが要求に應へ得るかどうかは疑問であるが、些かなりとも参考になれば、私の企てが無意義ではなかつたといふことになるであらう。

鈴 江 巢 場

人消えてしまひ未黒野つひに雲

【評】 佗びしさ、やがて親しさ、やがて明るさへ。作者の感情の美しき推移と、そこに運ばれたる言葉の妙を讃ふべし。

今野榮太郎

酒壺打てば出師の短夜興足れり

【評】 征く人と送る人と、ともに一つ心に結ばるゝ美しさ。そは我が國民性の芳ばしき一面を、遺憾なく射られたる句といふべし。

小野寺伸艸

麥の笛甘きに耐えず吹き止めし

【評】 童心湧然として溢るゝまゝ、しばらくは少年の日の夢を逐ふて止まず、たゞく恍惚たる佳境を遊歩するのみ。然り、童心を中心として膨脹せる詩情の、美事なる結實と言はんか。

大東亞戰爭勃發に際して

山本紫龍

太刀冴えん西に南に伊勢の風

【評】 神國日本人の征くところ、神刀忽ち光を放つて裁定せざんば止まず。あゝ忝けたし、伊勢大神宮は世界の西と云はず南と云はず、我が皇軍の太刀へ正氣を恵み給ふ

左近允峰月

大鷹に少年憑かれ野の廣さ

【評】 大鷹の傲然たる飛翔と、無心なる原野と、少年の恐怖心手に取る如し。少年を見守る作者の同情心は、脈々として句に漲れり。

松島晃山

鳶の輪の重なり山は枯れつくす

【評】 構想に又修辭に奇を衒ふなく、大膽卒直に對象と取組み、そこに寸分の隙をも與へざる句といふべし。一讀、肅條たる山國の景觀眼前に展開す。

小原一艸

星空をまさぐり冬木秀を描ふ

【評】 自然界の神秘なる活動と云はんか、星も亦冬木も各、それが美はしき力を盡して競ひつゝあり

前田芳明

冬海へ縹渺とバイブ黄にすさび

【評】 対象ありての自己か、自己ありての対象か。此の句はかゝる限界を超越せる句にして、新しき自然の姿と新しき感情の色彩あるを見るべし。

前田 奈古美

經し年の愁など白く白く菊

【評】 繊細優美なる感情は遂に菊の花の純白によつて、愈々鮮明化され情緒化されたり。かそけくも作者性の脈打てる句として賞揚す。

岩川 加都美

掬水氏を偲びて

君が面行く春の雲歸るなし

【評】 亡き學友を偲びて哀悼の情遣る方なく、故人の面影に去來する春雲の頼りなさを詠める句といふべし。

佐藤 志峰

嚴冬の地平定かに陽を落とす

【評】 凜冽たる氣配のうちに、劃然たる天地の様相髣髴として迫るを覺ゆ。

石田 溪花

つゝつゝと蓮開くより噉走りぬ

【評】 自然がかもす微妙なる音と色との交錯、それは一瞬時にせよ、作者をして神聖なる花園へ誘ひしものといふべし。

藤村 路生

姉妹の宵は花火の美はしき

【評】 宵の静かさ、花火の色の美しさ、姉妹の笑ひさゞめく聲など、間髪を容れずに迫るべし。平凡なる取材とはいへ、その間に通ふ和やかなる情味を、美事に收め得られし句なるべし。

中山 秋莊

山羊啼けば春の日多度の神出ます

【評】 美はしき平和を神に捧げんとするこゝろの句、まこと作者の美はしき幻想詩ともいふべし。

水 島 一 豆

口笛の木魂蓮の實飛んでみよ

【評】 同一直線上に於ける作者と對象が遂に結合して、美しき遊びをほしいまゝにせるものといふべく、鑑賞者には些かの臭味をも與へざる句なり。

廣 瀬 香 魚

神となる神となる兵に春雷す

【評】 一讀感激措く能はず、再讀神々しさに打たれて措くところを知らず。これ日本人の赤誠と皇軍の精神力の躍動せる句にして、永劫に光りを放つ句たるべし。

長 田 閑 曉

かへりみる齡いたづら寒を問ふ

【評】 寒さにかまけて一人ぼつねん、自畫像を自嘲してゐる作者の、或る日の溜息が微かに聞えるで

はないか。

山 同 雀 水

秋天を搏てば耀く音降りぬ

【評】 秋天の弾力は直ちに輝やかしき音を降らし、作者の氣魄に相答へて止まず。雄渾なる氣の漲れる句として推賞すべし。

阪 植 春 甫

乳兒いとし冬木の影を煩らへる

【評】 大きく見れば生活と自然との融合一如の境地であるが、父性愛の優美なる感情を、かくも無造作に、かくも無技巧に收められたる句は、蓋し稀なるものと云はざるべからず。

波 佐 間 麥 村

我老いて再び渡支す

【評】 此身誰ぞ秋の日脚は山に入る
西山に入らんとする秋の太陽を凝視して、人生の縮圖をまのあたりに想見せる時の叫びと言は

んか。作者の孤獨感は泌々として滲み出で、それを拂ひ退けること能はず、呆然たる態度のまゝ、暫らくは我と我が身を慰撫されしものならん。敢て言ふ、作者の嚴しき人生俳句なりと。

新 關 一 社

春の雲あふるゝ天を吾兒生るゝ

【評】 初子誕生の悦びが、やがては神祕的なる悦びとなるまゝに、作者は春の大空へ、春の暖かき雲へ、これはく美しき挨拶を交はされたり。まこと父となりし歡喜を、平明率直に表現されし佳句と云ふべし。

小 日 向 隆

時雨野は野ながら荒き鳥たたす

【評】 言辭の魅惑的なる驅使は遂に技巧の痕跡を認めず、作者即文字の境地を歩み、對象をして完全に我がものとされたり。

二 瀧 轟 々

學生等陽を撒き櫻實となりぬ

【評】 學生の無邪氣と明朗たる様相とは、新鮮發洩たる自然と相交りて間然するところなく、而かも其處に獨自なる心情、即ち温かき追憶の情を擴げ得たるものといふべし。

小 野 文 青

浮雲たゞ和平の秋をせめあへぐ

【評】 支那大陸の雲は正義日本に感應するか。その秋の浮雲は支那の良民に何を教へるか。支那の民衆よ、汝等の頭上を眺めよ、其處には日本人の暖かき掌も見えるではないか。

橋 本 花 風

初廬山恩讐我にあるべきや

【評】 天は天の法に地は地の法に従ふのみ。作者よく天地の悠久性を捉へて、而しておほらかに吾が胸をたく。その雄壯にして且つ寛容なる心境は、以て作者の赤裸々なる人間性を示せるものにして、蓋し花風氏の人間俳句の一つとして光彩を放つべし。

白樺のそのまゝ、秋の旅つくす

鈴木 葭 汀

【評】 讀むほどに旅愁の糸ほぐるゝばかり、やがて愉しき、やがて哀しき詩の交響樂聞えんとす。優雅なる自然に繊細なる感情溶け入りて、美はしく咲き出でたる花ともいふべし。

塙 温 *

しみじみとこほろぎ畫家は雲寫す

【評】 清澄透明の俳境と云はんか、殘滓を認めざる感情瀟過、それに伴ふ表現手法の圓熟は、遂に現實と自己の關聯以上の美を構成せり。

南 京

日 下 青 城

鶏鳴寺屋根青々と春を待つ

【評】 色彩美の快調に浮かれ出づるものは、豈春の女神のみならんや。作者は景中の美に酔つて醒めず、鑑賞者は句中の美を讀へて止まず。

天長節天皇臨下の萬歳を絶叫す

清 水 瓢 太 郎

風光るところ國境山河あり

【評】 陽あまねく風光る國境に、八紘一字の精神をまさしくと感じ、全身これ聖壽萬歳の赤誠に燃えたるものといふべし。一見容易なる文辭ながら、凜然たる氣魄の充滿せる句なるべし。

崎 元 風 骨

鷹の住む神木に天雷落とす

【評】 森嚴・幽寂・恐怖の感慨間髪を容れず、今更に自然の威力を擬視する作者の、端正なる姿を髣髴たらしめる句といふべし。

池 中 紫 雨

天どこまで螻蛄親を知らず

【評】 大自然の慈悲に逆らふ螻蛄であるとはいへ、見れば見るほどに憎むこと能はず、作者はその小さき動物の本性と人間の本性とを對比して、大いなる愛を注がれたり。

大前に團旗揺るがす秋の風

小森 憩 汀

【評】 緊張せる人々に相和す秋の風、こは非常時日本の一光景にして、一讀襟を正さしむるものあるべし。

時雨來と林泉の赤松さやけくも

松本 興生 人

【評】 時雨の音に調和する赤松の色彩感を、こよなくも妙に詠み上げられし作といふべし。

眼帯に日のぬくさあり水仙花

富士 芳 朗

【評】 第一印象として眼帯を通して日のぬくさを感じ、第二印象として清楚なる水仙の花に觸れたる悦びを盛られたり。

福井 白 洋

月今し雪の遠嶺にかゝりつゝ

【評】 巧妙なる表現手法により、對象を色彩的に一段と引立たせ、且つ又一句全體としての躍動性を加へたるものといふべし。

大田 青 村

蜂來たる事務の玻璃戸に正午の日

【評】 一句の構想、都會生活の明朗性と更に新鮮なる風韻をたゞよはす。

學童御親聞

水島 凡 史

擧手の禮賜ひ畏し東風晴るゝ

【評】 御英姿を拜してか、大自然は頓に威を整へたるものゝ如く、人々は皆一様に感激のこゝろに打ち伏したり。

水上 磨 砂

若葉風爆音雲に流れ行く

句評篇

【評】自然の美を美として濟まさず、其處に時代と自己とを生かさされたる、力強い人間俳句ともいふべし。

みちのくの日の丸そらにさはやかに

芝 八 百

【評】大きく見れば、日本の國土と國民の融合せる美ともいふべく、實に戦時下日本の美しき一象徴句にして、一句よく活きたる骨と肉とを具へたり。

會津鶴ヶ城にて

岩 代 不 凡

古城なる水昏れ残り秋ざくら

【評】無言の古城に、一入のあはれをそよる情景といふべきか。対象なるコスモスの花の暮れんとするや、凜然たる雰圍氣の裡にたちまち會津悲史が展開されてゆく。

筑 波 紫 峰

蟬しぐれわが一族のみなはだか

【評】あまりにもありふれたる取材ながら、素材そのものゝ素材は粗豪な表現と相俟つて、盛夏の中の平穩なる一景を、美事に浮き出したるものといふべし。

守 屋 栢 軒

霧の海埠頭明るき祖國入り

【評】作者の歡喜に融合する海の霧の暖かさ。其處には「日本人」のみが體得する、大いなる力と秘められたる歡びとを持つ。

陽 月 峯 柳

焚火なほ熾ん野面の曉動く

【評】構想は繊細にして尖鋭、しかも対象の把握よく調和せるを以て、冬寒黎明の一景躍如たるものあるべし。

澤 口 綠 洋

遙拜の民草早し枯柳

【評】 皇恩感謝の心、とりもなほさず愛國の心魂烈々たるものあるべし。一見平明なる句に似て平明ならず、超非常時のきびしき俳詞を射られたるものといふべし。

大松 小葉子

除夜の鐘いつものごとく寺ありぬ

【評】 人間を疑ひ而して人間を肯定し、自然を疑ひ而して自然を肯定する作者の、一瞬時に於ける異常なる心理状態をよく描き出されたる句なるべし。

宣戦の大詔を拜す

高崎 慈舟

大詔を拜す冬日輪神のごと

【評】 凜乎たる氣構の結晶したる句。大いなる光りを凝視したる作者の眞面目、さながら不動尊の如くに髣髴たり

駒ヶ嶺 不虛

銀杏散る沙彌と世間の子とむつみ

【評】 まこと法悦の畫幅に相對するものゝ如く、清純なる氣を注入して止まず。

泰山 永壽

ヒヨ鳥は雪を呼んだか雪垂れる

【評】 對象の構成に妙を得られしため、對象をして一際美はしからしめ、更に一句全體へ活を入れ得ることゝなれり。

竹内 直治

觀世音に雪垂れ美し紅椿

【評】 宗教に捉はれず、且つ又自然美に捉はれず、しかも對象が醸す美麗なる姿の中に、侵すべからざる尊嚴を具へたる句といふべし。

櫻井 太平

ぬるむ河汽艇ははずむ音と來ぬ

【評】 水の色と汽艇の響きの調和するところ、そはさながら奏春譜を擲げたるにも似たり。

河本彦二郎

柚の子に愉しき玩具蟬時雨

【評】 自然と人間との交渉するところ、素材の純粹性によつて句も自ら素朴となるものであるが、この無飾粗放なる表現は却つて對象に活を得たるものといふべきか。

一戸耕雨

降るか雪北より鳥の群れ來たる

【評】 微妙なる自然觀照に、作者独自の純粹且つ溫雅なる詩境を見出すべし。

糸川百翠

公葬の真中紅葉散る淋し

【評】 一讀あはれを、再讀更にあはれを誘ふ句。聲を呑んで默禱する作者の心中を推察すべし。

櫻井れい子

蟬暑し一山の樹々動かざる

【評】 構想の妙は、遂に盛夏をして盛夏以上の氣を呼びたり。靜にして騒、騒にして靜、更に暑中の涼を感得すべし。

東谷清風

龍膽はすゞろ朝餉の日にほふ

【評】 對象を把握構成すること妙にして、一讀清新爽美の氣溢るゝものあるべし。

飯野恥盡

學徒隊相撃つ川原鳥渡る

【評】 自然を巧みに配合して、戦時色豊かなる情景を描かれたるもの。蓋し現下學生々活の一面を衝きたる句と見るべし。

萩原斯文

鳩鳴きて眞蒼に春の雲暮れぬ

【評】 靜かなる對象の調和美といはんか。微吟低唱おもむろに哀愁の糸を曳いて盡くるところなし。

相内掬水

郷愁に堪へなん庭の桃開らく

【評】 遣る方なき感情を、明るく、美しく、而かも調べ高く、整へられたる句なり。

石津玉峰

新緑に營林の記帳明るけれ

【評】 自然を詠んで自然に負けず、生活を詠んで生活に負けず、只管自己の新しき詩的感情を詠まれたるよろし。

廣瀬日出夫

秋の雲たゞにましろし看經す

【評】 純一無垢なる心境を希求するところ、そこには作者のみに許されたる美しき悦びを秘めたり。

菅原一峰

芒光茫旅人ちさく追ひやりぬ

【評】 自然と人の融合一致せるときの動き、これ即ち作者の透明なる詩境に反映せる、秋のあはれともいふべし。

福盛田耿堂

けら眠る森に月光さすことあらむ

【評】 知性の鋭き閃きがかくも圓かなる詩、美はしき詩を招きたることの不思議、しかも感傷に落ちず、現實を昇華せる句となりたるは、實に作者独自の妙境といふべきなり。

駒ヶ嶺弗子

朝寒や玻璃戸にうつる山羊の面

【評】 一讀、和かなる雰圍氣はひた／＼と押し寄せて止まず。思ふに無造作にして溫和なる句とは、斯の如き句をいふべし。

渡邊甚太郎

鳩や鳩晝の島浮き静かなる

【評】大自然が妙なる象を作らんとする刹那の、靈力に觸れ得たる作として推賞すべし。

田中清女

金波銀波春惜しむてふさゞめごと

【評】美を盡さんとする波の色彩、美を盡さんとする波の音調、げにやこよなき春の伴奏ともいふべし。

旭光洋

潮鳴りも木鳴りも浅き春なれや

【評】「あゝ早春！」と思ふ音が二つ重りて、自然さながら春を奏でる聲と聞く。いさゝか詩感の説
明あれど、素朴なる心境に觸るべし。

安藤開花

織初めの窓をあくれば人來たる

【評】祝はんかな此の日、耳に聞ゆるもの目に見ゆるものに、たゞく悦びの心あるばかりなり。

田中茶城

小手あげて蝶のゆくへを見守れり

【評】この句の中心へ届きぬる作者の直線的なる悦びを、見る人よ見るべし。背後には無限の法悦さ
へ漂ふ。

清水竹葉

雁鳴く夜遊子の一人侘しけれ

【評】大自然の閑寂の中に、置き残されたる旅人の侘びしさ。測々として迫り來るものは、人生に摩
擦する晩秋のあはれなるべし。

岡部あきら

雛の客内裏を真似て坐りける

【評】あたゝかきユーモア詩、そこには心と心の相ふるゝあたゝかさあるのみ。

佐藤菊水

樹に倚ればこゝだくの花の散りにけり

【評】 清浄なる自然、玲瓏なる花をして容易に句たらしめる、こは作者の安住なる境地の然らしむるところといふべし。

小 知 哲 二

夕 櫻 小 米 櫻 の お 寺 かな

【評】 全體的に迫力の乏しさはあるにせよ、最初に夕櫻と言ひ放ち、續いて小米櫻と限定したるため、表現に美と調を得たるものなるべし。

國 安 雨 竹

六道の繪像を蟲が鳴き古るす

【評】 作者の圓熟せる境地よくこの句をものせり。再讀しみぐくと湧く句情に味到せられよ。

森 本 稚 堂

飛行機の快音松の花粉飛ぶ

【評】 第一印象と第二印象に間髪を容れず、そこに作者独自の美詩を生みたり。實に聽覺と視覺融合の美詩といふべきなり。

茂 林 沙 木

屋根替へし明るさ遠忌修しけり

【評】 敬虔なるこゝろ、やがて安らかなるこゝろ、素直に作者の片鱗を傳へたる句といふべし。

佐 藤 紫 池

煙はろ浪はろ磯家かぎろへる

【評】 青陽明々の感を、十二分に漂はしたる句なるべし。

渡 邊 春 子

柿匂ふ畑に日當り子をあやす

【評】 餘りにも愛郷的な、餘りにも愛情的な、餘りにも自然的な、人間生活の美しさ。蓋し讀み飽かさる句、しみぐくと愛のふくるゝ句といふべし。

梅雨明けの山々青ふ枇杷の風

伊東一夢

【評】 瓏々たる自然と明快なる創作感情の結合は、こゝに透明なる美感を構成せり。

鵜飼舟叩く音やみ月や出づ

神戸凌雪

【評】 音と色との静かなる讓歩により、又作者の聽覺の妙なる調和により、かくも靜謐、かくも典雅なる句を生みたるなり。

黒榮えの佛像じめじめ灯を濁す

草替小ト天

【評】 素材の美妙を掴み、そこに活性を與へられたる句といふべし。

稻妻が光るよ海の六日月

岡崎一陽

【評】 月は稻妻により、海は月により、稻妻は海によりていよいよ印象的色彩を放つ。

山一つ五つに見えて時雨れけり

岡橋老水

【評】 寫實の妙は遂に對象を對象以上にし、更に對象に躍動性を與へたり。

櫻貝ひんやりと君が爪の色に似て

賀來琢磨

【評】 貝の色のこよなき美に、湧き出づる情緒のあたゝかさ。譬へば、まどかなる想ひの球に觸るゝにも似たり。

冬薔薇の映えて山脈暮れんとす

蒔田拾句

【評】 山景とみに作者の詩情に和して、昏るゝを惜しむが如し。

川邊竹志

まぶしさのぼつと夕陽がトマト熟れ

【評】 自然界の瞬間的なる活動、そこに醸成されたる作者の喜悦を掬すべし。

十騎神社

國井千草女

春空にとどかふ銀杏十騎の碑

【評】 新田義興と死を共にせる忠臣十騎を祠れる、十騎神社に参りての作ならん。作者は忠勇無比なる志士を偲ぶ心もだしがたく、感極はまつて銀杏の大木を凝視され、其處に美しき日本精神を把握されたり。

田中一山

鐘響く里のさゞめき雁渡れ

【評】 緊張せる形態の裏に、自然と人生の穩かなる調和を見出すべし。この句を靜讀すれば、力ある音律とともに、田家の豊かなる雰圍氣の膨れ來るを知るべし。

林雪村

いかのぼり伸びよ鵬程九萬里

【評】 誇張・作爲あるやに見らるゝも、豪放なる氣魄に富み、しかも飛躍日本の實相に觸れゐる作といふべきか。

太田青舟

凍空に鷗ばかりが翅のばす

【評】 自然は自然なるにもかゝらず、吾々が思惟する自然は、往々不自然なることあるべし。この句はかゝる間隙に咲き出でたる美しき詩か。

俳句指導篇

戦争と俳句

俳句は低俗なる趣味に遊ぶもの、又は餘裕ある人々が玩弄するもの、などといふことを未だに考へてゐる人がないでもない。俳句がそんなに生ぬるいものであるならば、大東亞戦争の今日、既に俳句などは消えて無くなつてもいゝ筈である。それにも拘らず、平時以上に俳句を作られる方が殖えて來てゐる。匆忙と緊迫に生きる銃後は勿論のこと、生死を超越して戦争されつゝある將兵にして、俳句を作られる方の何と夥しいことか。それから或ひは野戦病院に、或ひは内地の軍病院の傷兵にして、俳句を求められる方も日に日に多きを加へつゝある。

これは何がさうさせるであらうか。私は思ふ。激しく大和民族の血潮がたぎつて來たことゝ、現實の世界が大きな變化に遭遇して、われわれがとかく自分の存在を打ち消されやうとするために、それをうけとめなければならぬ、止むにやまれない自然の要求が俳句となるものである、と。つまり今日の、否今後の日本に嚴然と生きんがために、自己の生命を多少なりとも自覺する結果に他ならないのである。

そこで私は望む、假りにも作られる俳句は戦地と銃後とを問はず、戦争の、又は戦争下の生活の報告であつてはならないことを。報告などは、ラジオや新聞等で充分である。俳句を作るならば、飽く

までも自分の俳句を作つてほしい。私が何時も叫んでゐる個性俳句を作つてほしいのである。先般従軍文學者富澤有爲男氏は「藝術論」に於て、「本來ならば個性もへちまもない、たゞこんとんたる大群衆が一緒にまき込まれて押し流されるべき戦場のはずである。おうよそ弾丸と食糧以外は何物も不必要でなければならぬ戦場に、しかも平時には見られなかつた個性が擡頭し、何んの足しにもならぬ文字が行はれるのである」と云つてゐるが、大いに考へさせられるところがあらう。

脚下を見よ

今日の我國には、世界無比なる春光が漲つて來た。かくて吾々一億同胞の一人々々にも、脈々として新生の力が響きをたてゝゐる。こゝに於て吾々俳句するものゝ位置は、嚴しい、力強い、輝かしい土の上に置きき換へられたのである。従つて徒に傳統に追従したり、傳統に逃避したり、傳統に陶醉したりすることは許されない。つまり傳統の美を知らずに、傳統の美に依頼してはならないといふことである。いちやく傳統を消化し、その上に敢然と自己を打ち建てなければならぬ。私は言ふ。古典を讀め、古典を知れ、古典に迷はされるな、而して明かに今日の自己を見出すことである、と。今や形の藝術は媚態を盡して退散しつゝある。見よ、生命のない美しさ、例へば自然を美しく描寫した俳句の如きものなど。吾々が日本の新しい生命を、そして自己に新生した力を句作し、日本人と

しての誠を盡さうとするならば、いふまでもなく心の問題であるから、吾々はひとしく自己の精神・思想・信念をして、ひたすらに至純・剛健・強靱たらしめなければならぬのである。

眞の新しさ

俳句は段々むづかしくなるともいへよう。なぜならば眞面目に俳句する人々が、がつちり身に添うたものをとらへ、しかもより新しいものを詠み出さうとつとめるからである。自然既に他人が通つたところの、俳句的境地を詠むことをいさぎよしとしない。こゝに新しいものを創らうとして、時代といふものや、自己の感覺といふものについて足搔くことになる。

しかしほんとうの新しさといふものは、さうたやすく見つかるものでもなければ、創られるものでもない。實に眞摯な態度からではあるが、泥まみれに苦しんで掘りあてた新しさといふものは、眼に見えるところの新しさ、すなはち形の上の新しさが多く、ときにこれはと驚くやうなものがあつてもつまりは一寸眼を刺戟して、わづかに感覺に染められたといふていのものである。どうして眼に見えないところの新しさには觸れることが出来ないのか。

これは、前進しようとして前方を見渡したとき、こまかい澤山の道が眼に入つて、はたしてどの道が新しいのか、五里霧中で歩いてゐるやうなもので、もつとも大切な後ろの道を忘れてゐるからであ

る。後ろの道は過去ではあるが、その過去の舊い道を知らないで、新しい道を求めようとする事がそもそも無理であるといへよう。

最近十年間世界の詩壇は混沌として、何等見るべきものがないが、英吉利だけが常に歴史的な意識を捨てないから前進してゐる。例へば詩人が詩を書く場合、又自己の詩の立場を主張する場合、自分の詩が今日のやうな地位にあるかをはかるのに個人的な意見は通らず、傳統的、歴史的な意識によつて批判されるから、健實に伸びてゆくのだといふやうなことを、春山行夫氏が「文藝」誌上で云つてゐるが、これはわが俳壇にもあてはまる考察といふべきであらう。

俳句の新しさ、ほんとうの新しさが容易に見出されないといふのは、わが俳壇の論評の不確實、偏狭などに影響してゐることも挙げねばなるまい。得手勝手な批評、或ひはさうでないにしても、批評家そのものが、俳句の一般に亘つて諒解してゐないものが多く、殊に過去の俳諧俳句などについてはまったく白紙状態にある人さへある。

かやうな論評が大袈裟に取り行はれてゐるかぎりには、ほんとうの意味の新しい俳句などがわかるものではない。かへつて俳句の道が掻き交ぜられてしまふために、折角の道も無くなつたり、或ひは消えかゝつてしまふのである。

かく述べたやうに、今日の俳人達が非常に眞剣な態度をもつて、俳句にのぞんでゐるにもかゝらはら

ず、じつに混沌として收拾すべからざる状態にあるのは、俳句作家の無智にも因ることではあるが、批評家或ひは指導者といふ立場にある人が、餘りにも盲目なためであることは、今更私の言を俟つまでもないことである。

そこで古典を、と古典をかつぎ出す私ではないが。といふよりも、温故知新の如何に重要であるかは、既にあらゆる俳人が承知してゐることで、こんなことをこゝで云ふだけ古くさいことにぞくするのであるから、ことあらためて云はうとはしない。が、しかし、新しい感覚、新しい時代などといふことを假りにも云々し、正しい批評を下したり、新しい俳句を作つてゆかうとする意圖があるならば、傳統の業績を没却することなく、過去の俳人が歩んだ道を、たとへ大雑把にせよ、一とわたり踏んでから脚下におさへつけ、そこに自分が毅然と立つてゐるやうにしたいものである。

自分の俳句が新しいといふ前に、自分の俳句の新しさを、どんな定規で測つたか、その定規を考へてみるがよい。自分の定規は狂つてゐなかつたか、自分の定規に狂ひがないと云へる人が何人あるか。

自己創造

今假りに彫刻する人の前に一つの石材が置かれたとする。しかし、その石材は彫刻する人の頭と腕

によつて、どんなものになるかわからない。或ひは素晴らしい藝術品となるかもしれない。或ひは又は石材以下のものになるかもしれない。恰度これと似たやうなことが、わが俳句に於ても云へるではなからうか。

よくきく言葉であるが、近頃俳句になるやうな光景に接しないから俳句が出来ない、と。俳句を、まるで變つた景色を寫す寫眞のやうに考へてゐる人がすくなくない。すなはち石材さへ變れば其處に必ず違つた藝術品が作られるもの、と思ひ込んでゐる人の何と多いことか。この種類の人は、折角の石材を取扱ひながら、石材以下にしてしまふおろかしい人々である。實に美事な石材であるにもかゝらず、臺無しにされてしまつて、惜しいことをしたと思はれるものに、毎月瞥見するところの旅行の句、吟行の句がある。

藝術の無いノミを用ひないこと、このくらゐのことは、一々句作の場合に意識するまでもないことであらう。第三者から「あなたの俳句を読むよりは繪葉書を見る方が増しである」と、又「繪葉書の解説の方が勝れてゐやしないか」などと思はれないやうにしなければならぬ。

俳句はものを寫すものではなくて、自己を創造するものである。従つて殊更珍奇な光景などを逐ひ求めることは、まるでピントが外れてゐる。と同時に、忙はしくて自然を鑑賞してゐる暇がないから又旅らしい旅もしないから、俳句が出来ないのであるといふことは、本當に俳句を作つてゆく人の口

實にはならない。

x

俳句は過剰な感傷の捨場であつてはならない。俳句は夢想家が退屈紛れに拵へ上げた、詩想の遊戯であつてもならない。又常に感情の昂奮であつてはならないことはいふまでもない。かうした異常な現れによつて生まれた俳句は、どこかに誤謬を含んでゐるものである。俳句はいふまでもなく時代の上、又人間の上に正しくあらねばならぬものである。

この點よりして、現實を深く探求し、生活に眞のすがたを見出してゆくために、あらゆる努力を惜しんではならない。誰しも逐ひ求めてゆくであらう理想の境地、それを建設するには基礎がぐらつかないやうに、多くの土臺石が必要であると同様に、たゞに俳句のみならず、一般藝術に關しての豊富なる土壤を盛らなければならぬ。

われわれは、低い汚い土地に咲いてゐる花を見るよりは、高い所に美しく咲いてゐる花を見ること、より大なる悦びを感じるものである。それは智的にも感情的にも豊富な土壤をもとゝして、其の上に開花したものであるから、美しい色を、馥郁たる香りを放つのである。

感傷家、夢想家、昂奮家のものしたる俳句、それを譬へて見れば、なよなよとしてゐる花で、どこかに無理を孕んでをり、一寸見は美しいやうであるが、飽かず眺めてゐると嫌氣がさしてしまふ。何

となればその花が開花するのに非常に滋養が不足してゐたからである。つまり開花には開花に到るまでの適當なる滋養を吸収しなければならなかつた、といふことは今更いふまでもないことである。これを俳句で云へば、さうした種類の畸形的な俳句は、感情ばかりが勝つてゐて、知性を缺いてゐるといふことになる。

俳句は美しいもの

私は誰れも未だ見たことのない湖をみつけて、其處へ小石を擲つた。そのときの波紋は、譬へやうのない美しいものであつた。それが即ち私の俳句である。たとへばこのやうに俳人たるものは、めいめい誰れも知らない湖を發見して、小石を擲つたときに生れた波紋を、自分の俳句とすべきである。こんなことを六七年前であつたか。或る文學雜誌へ俳句の感想として書いたことがあつた。今日全幅的にこのことを主張してゐる私ではないが、しかしその骨子に於ては、少しも變つてはゐないつもりである。

こゝで私が言ひたいことは、一體自分の俳句をどんなところへ置くべきであるか、つまりどんなところを捉へたら自分の俳句になるかといふこと、これを要するに俳句が作られる前に、自分の俳句境地を樹立して置くことが大切だといふことをいひたいのである。

さきの湖と波紋の例によると、大自然と自分の交渉だけに限つたかの如く見られるかもしれないが、私はそんな小さい局面に限定してゐるのではなく、自分と俳句といふところに眼目を置いて引例したのである。従つてそれは對象を自然に置かうと、人間に置かうと、又は人間や動物の感情に置かうと勝手である。即ちそれは、如何なるところへも通じなければならぬものである。私が過去十數年印象俳句と謂ひ、又新藝術俳句と謂つてきたのも結局はそのことであつて、適當な言葉が無いからさうして置いたに過ぎないのである。

ところで又湖と波紋の話になるが、最初に引例した短文をじっくりと考へられ、ば納得されるやうに、自分の俳句には未だ曾つて他人が侵したことの無い、美はしさがなければならぬといふことになる。その場合、自分も侵したことの無い、美はしさをでなければならぬことは、いふまでもない。

たゞしその場合、構成されたそのまゝの美を取上ぐべきか否か、問題となつてくる。まだこれだけの言葉では私の説明が不充分である。といふのは、構成されたその儘の美なるものが、現實の美であるか或ひは作者が希望してゐる美であるか、といふ點に疑義が起つてくる。そこで私は、はつきりと言はう。その理由は次第に理解されると思ふが、かりにも作者が自分の俳句を作らうとする心構があるならば、現實の美だけで満足してはならない。必ず作者が逐ひ求めてゐるところの美は美しいもの、言葉を代へて云へば、永遠に理想としてゐるやうな美を求め入れなければならぬのである。實に作

者の生命といはれるものは、此處に存在してゐるといはねばなるまい。例へば作者としての人間・風格・個性などといろいろな言葉で呼ばれるものは、即ちこゝに見出されるのである。さきの湖と波紋の例で云へば、其の場合かもし出される神祕的なもの、つまりその現實を起えた美しさを、自分の美として詠まねばならぬといふのである。

これを極めてわかり易くいふために、俳句に十割の美を必要とすると假定しよう。その場合八割までは現實の美であつてもよいが、あとの二割だけは作者が逐ひ求めてゐるところの美、或ひは遂に到達し得ないかもしれないが、到達し得るかもしれないところの美はしいもの、又謂へば夢であるかもしれないが、夢でないかもしれない美はしいもの、そのやうなものが入つてゐなければならぬといふのである。

若しこゝに私の言ふ二割の超現實美が入つて居らず、たゞ現實の美だけであつたならば、誰れにも容易に感得出来るところのものであるから、鑑賞者の魂にふれるところが尠く、敢て藝術的表現を與へるにも値しないといひたいのである。又そのやうな美は、時代ととも死んでしまふか、さもなければ敢果なく美の價値を失つてしまふものである。俳句は文化にひきづられて發展するものではないのだから、俳句の美はつねに時代の上にあらねばならず、社會的なるものからは遙かに超越してゐなければならぬのである。

今日の俳句について

願れば今年くらゐ俳人の足並の揃はないと思はれるほど、月々の俳句が亂れきつてゐたかく異常なる現象に不安を感じつゝ、私は手當り次第他所の俳誌にも、間斷なく目を通して來てゐるしかしこのことは敢て我等の集團に於ける異變といふよりは、むしろ他の雜誌に於てこそ顯著なものが見られるやうである。

ともかくも足場の揃はないといふことは、俳人に悩みが多いといふことを如實に物語つてゐるものである。この原因はいふまでもなく、未曾有の時局に際會し、變遷發展行くところを知らざる世界情勢に對して、自分といふものゝ姿が不鮮明になつた結果ではあるまいか。

こゝに於てほんとうに俳句を作つて行かうとする人々は、ぐつと目を開いて、自分の足もとを見直さなければならぬのである。勿論今日まで日本と俳句といふことに、凜然と目をみはつて來た人に對しては、何をか言はんやであるが、半ねむりに俳句をたのしんで來た人は、よろしく目を開くべきであり、更に芭蕉の閑寂境・蕪村の艶麗境・一蒸の飄逸味に追隨し、はた又所謂俳諧趣味などに陶醉して來た人は、實に冷水をもつて目を洗はねばならぬのである。それほどに今日の俳句作家には、緊迫したものが必要とされるのである。否言葉を換へて云へば、俳句作家が今日まで、「誠」や「純粹」

といふやうなことを留守にしてゐたといはれても致し方があるまい。そこで今日當然問題となつてくるのは、傳統的句作態度を揚棄して重大時局の種々相を詠まねばならぬか否かといふことである。このことは或俳人への反省としてはよき示唆を與へるものであるが、一概に是非を論ずることは出来ない。とはいふものゝ一方傳統俳句のマンネリズムを打破するためには、この上もない警鐘となるであらう。何となれば自分の俳句や句作態度を再吟味するといふ事は、それが必ずしもよき結實を豫約されないものであつても、ともあれその人の俳句觀には清新なる空氣を與へることが多く、又潑刺たる力を加へることが多いからである。然るに他方重大時局・戦争・非常生活等々現實の社會環境のみを對象とし、強烈な現實面のみを反映したテーマを句に盛ることは、時を得、人を得るならばそれでよろしいが、誰れも彼れも雷同して靡き、直ちに自分の句作態度を改變してしまふことは早計といはるか、むしろりきみ過ぎて自己を忘れたといふ嘲笑を免かれないであらう。

俳句作品は何時如何なる時代に於ても先づ自己がその根幹をなし、それを構築してくれるものが時代であり、又生活でもある。従つて世界情勢が如何やうに動搖しようと、自己を没却しては俳句藝術がない筈である。それにも拘はらず、今日は事變最中であるといふところから、一方砲煙彈雨の句が歓迎され、他方銃後俳句としては、矢張り事變に直接關係のある取材をもつてした句が歓迎され、ために強ひらるゝ如くに、さうした傾向の句を作る人が少くないやうである。これなどは全く自己を忘

れた俳人ともいふべく、可惜時局に壓しつぶされた人と云はねばなるまい。

若しもさうした局に當つてゐる人ならば、それが自己であり眞實であるのだから、それで甚だ結構な次第であるが、さうでないところの人々が強ひられるやうな句作態度を採るといふことは、この場合もつとも慎しまねばならぬことである。各人には各人の位置がある筈である。それを忠實に護つてこそ、自分の俳句が生命を持つものである。

ともすればわれわれは社會感情に巻き込まれ易い。社會感情は大きな力もあり、且つ又非常に強い魅力をもつて迫るものである。われわれはうつかりすると自分が消されてしまふ。自己保持といふとは實に容易なことに似て、なかなか六ヶ敷いことである。足場の揃はない句が目立つて來たといふのも、つまりはこんなところに原因が胚胎してゐるのではなからうか。

ところでわれわれは時代的に、不感症的な態度を採つていゝとはいはれない。そんなことは一日も許されないことである。一日々々とわれわれの周圍は豫測出来ない方面へ擴充しつゝある。そこでわれわれはすべてを認識し、且つ消化し、而して新しい感情の萌芽を見出すとゝもに、其處に毅然と自分の俳句を建設すべきである。あながち現實の社會面に限ることはない。例へば自己の與へられた生活面でもよし、又は祖國の天然・自然との交渉であつてもよろしい。

これを要約して云へば、今日の作句上の悩みを解消せんとするには、自己の背景に「日本」といふ

ことを、強くそして大きく感じなければならぬといふのである。日本といふことを昨日より以上に感ずることによつて、われわれは形はともかくも、俳句藝術の血潮をより以上鮮かに純化することが出来るであらうと信ずる。

自己に立脚せよ

かつて蕪村が不易流行を論じた桃李序に、「夫れ俳諧の活達なるや、實に流行ありて實に流行なし、たとへば一圓廓に添て、人を追うて走るが如し、先んずるもの却て後たるものを追ふに似たり、流行の先後何を以てわかつべけんや、たゞ日々におのれが胸懷をうつし出て、けふのはいかいにして、翌は又あすの俳諧なり」といふ一節がある。これは主として内容及び形式の模倣追隨を訓戒し、痛罵した言葉であるかもしれない。

この言葉を素直にうけとつても、われわれには反省すべき多くのものがあるではなからうか。例へば自分が自分の俳句を作るといふことを忘れて、「その句のやうに味のあるものを詠みたい」、「この句のやうに新鮮な詠み方がいゝ」などと考へ、その感慨が或ひは固定し、或ひは動搖してゐる人があるはせぬか。若しもこの程度の人であるならば、自分は傳統俳句の遵奉者であると思ひ込んでゐても、又は革新俳句のグループの一員であると稱してゐても、いづれにしても所詮はイージーゴーイングの

見本俳句を陳列してゆくに過ぎないのであると、蕪村は喝破してゐる。

徒に蕪村を禮讚し、今日これを誣ひようとして、今更蕪村の言葉を引用したわけではないが、蕪村の眞摯な心構から學ばねばならぬ多くのものがあり、且つ又推し擴げてみると、作句啓蒙の暗示たるものが尠くはないのである。すなはち俳句は技術や表現の問題ではなく、今日のおのれが胸懷であるらねばならぬと云つてゐる。これに類したことは読み飽きるほど読み、聞き飽きるほど聞いて居られるかもしれない。それにもかゝらず實踐されて居られる方が幾人あらうか、極めて寥々たるものである。

私は諸子よりも俳句を多く見、且つ讀んで來てゐるつもりである。勿論將來といへども、古俳句の研究を繼續してゆくとともに、現代作家の俳句選も殖えてゆく一方であらう。従つて大袈裟に聞えるかもしれないが、一日二百や三百の俳句に目を通さぬ日はあるまいと思ふ。そこでつくづく考へさせられることは、技術の俳句、表現の俳句の如何に多いことか、實にうんざりさせられてしまふ。つまり技術や表現が八九割の勢力を占めてゐるので、作者が見えるか見えないくらゐ、本當に悄然としてゐるといふみすばらしい俳句である。ときには作者が句を作つたのではなく、技術や表現が句を作つてくれたのではあるまいか、などと思はれるものもある。更に仔細に検討してみると、技術や表現に重點を置かれた句であるが、あはよくば其處に自己を打出さうと努力された形跡のあるもの、そんな句に

接することもしばしばある。

ともあれその努力は買ふべきであるが、しかしながら遂に無駄な骨折になつてしまふことを考へなければならぬ。模倣した技術や表現、又模倣されるやうな技術や表現、それらはすべて一圓廓に添うてゐるものといつてもよいであらう。それゆゑに先んじようとして、却つて後ろのものから追はれ又他方追ふ人はいつまでも人の後ろを追うてゆくことになる。技術や表現は、これを譬へてみれば身に纏ふ衣服のやうなものである。BがAの衣服を身に付けることも出来、又CもAの衣服を身に付けることも容易である。しかしBといひCといひ、絶対にAといふ人間にはなることが出来ない。それと同じやうに俳句に於ても、常に自己に立脚したものが産み出されなければならない。

新しき自然

大自然には新しいも古いもない、おかしなことを言ふではない、と一笑に附せられるかもしれない。なるほどそれには違ひないが、昨日までの大自然を今日の大自然として、うかうかとすましては居られない時代に遭遇したのである。つまり言葉を換へて云へば、傳統を傳統としてたゞ誇り、傳統の頭をさすつて悦に入つてゐることを許されなくなつたのである。六ヶ敷く云へば傳統の前進、日本文化の高度發展と高度擴充を要請される時代に入つたのである。

こゝに於てわれわれは俳句文學の傳統性を再吟味し、そこに基礎を置いて、今時代の俳句を産んでゆかなければならぬ。かうしてみると大自然に對しても、昨日までのやうな自分であつてはならぬといふことになる。これをわかり易くいふと、對象は假令一山一木一草であるにせよ、それに對する自分が昨日とは違つた自分、つまり今日の日本に立つてゐる自分でなければならぬといふことである。又それとも對象なる山・木・草そのものに觸れても、たゞの山・木・草として打過すことなく、そこにもなんらかのかんじに於て、日本といふことを感ずるやうにならなければならぬ。

大分やゝこしい言ひ方であるかもしれないが、これで新しい自然といふことがほど理解されたものと思ふ。六ヶ敷く考へれば非常に六ヶ敷いものとなり、簡単に考へれば簡單なりに理解が附くものである。何といつても境地の深淺程度によつて、それ相應に理解すればよいといふことになる。

私が日本々々としきりに繰返すので、ことさら意識を強いるやうに思はれ、ひいては清純なる藝術を冒瀆するかのごとくに思はれるふしもあるが、それは藝術至上主義に溺れ、日本も自己も忘れてしまふ人々が少くないので、敢て注言として採らざるを得なくなつたのである。それほどに今日の俳人には、俳人の常識には、日本といふ質が不足してゐるのだとも云はれるのである。

俳句の本質、日本文學の精華といはれる俳句の本質に、われわれは段々と近づいてゆく。近づいて行かなければならぬのである。そこでわれわれ俳人の常識に、もう一本「日本」といふ注射を打つ

必要があると思ふ。この注射はどんな俳人に對しても、利き過ぎて害になることが斷じてない、と私はこゝに言ひ切つて置く。

このやうな考察のもとに、私は多くの俳人に向ひ「特に日本を意識して作られたる俳句、及びそれについての感想」を求めてみたのであつた。ところが或俳人は日本を意識しないで作つた句は一つもない、自分の句は全部が全部、特に日本を意識して作つたものばかりである、と皮肉つて來られた。勿論それも理窟としては成立つのであるが、さういふ人に限つて言ふことゝ行ふことゝが一致してゐない。どの句もどの句も極めて平凡な自己満足の句ばかりで、あきれ果てたのである。

この稿を読まれる俳人の中にも、さういふ感慨を持つて居られる方がないでもあるまい。しかし理窟を言ふまへに靜かに、自分の句と句作態度をふりかへつてみられるがよい。若干胸にこたへるところがありはしないだらうか。若し幸ひにも私の言ふことが前進への暗示を豫約するならば、望外のよろこびである。

昨日までかけてゐた眼鏡、親しみぶかい眼鏡をはずすことは惜しからうが、その眼鏡をはずすことによつて、われわれには豫期しないよろこびがもたらされる。各々が新しい自然に浸りうる幸福が、すぐそこへ來てゐるのである。

俳句の季について

私にとつては、今頃有季無季が問題ではないのだから、これについて筆を採らうとすれば、恰度學生が試験にのぞんだときのやうに、嫌に改たまらざるを得なくなつてくる。それほどに今日の私は、季について無關心である。といつて有季でも無季でも、どちらでもよいといふやうな、そんな曖昧な態度を採つてゐるのではない。

まあ私の心を、正直に披瀝することにしよう。以前は俳句と季との關係を大分問題にしたり、又それについて相當悩んだこともしばしばあつた。さういへば俳句と季との問題はなかなか六ヶ敷しいから、それらに觸れることを忌避してゐるのであらうと思はれるかもしれないが、そんな偏頗な心は微塵もない。

あつさりいへば、始終つきまとつてゐたものだから、遂に季が私の身に融け込んでしまつたものといはうか、或ひは私の俳句の中に同化してしまつたものかもしれない。一寸話は大きいやうだが、つまり季を超越したとでもいふべきではないだらうか。そこで私に言はしむれば、季を問題にしてゐるうちは、季に捉はれてゐることであり、ひいては俳句に捉はれてゐるといふことになる。なにものにも捉はれないやうにならなければ、自分の俳句が出來ないし、本當の俳句も出來ないのである。簡單

に云つてしまへば、俳句に熱心であれば、俳句と季は一體一如になる、と斷言出来るのである。

季を超越することは容易でないかもしれないが、又容易でもある。畢竟するに俳句熱愛といはうか眞剣な心が解決してくれることになるのである。假りにも作句年月の長短などによつて、支配されるところのものではない。従つて初心者は、季について惱めるだけ悩むがよろしい。そのうちには不知不識に離脱してしまふことになるであらう。

こゝに警告しなければならぬことは、長い間句作生活に携はつて居られる方にして、季へ屈従される向のあることと、それから反對に季へ反抗される向のあることである。前者はいふまでもなく俳句を作るつもりで、その實俳句に弄ばされてゐるといふことになる。後者は進歩を、自由を求めるつもりで、その實俳句の軌道を外れてしまふといふことになる。しかしかうした人々でも、自分の心構へを省ることによつて自覺するところがあれば、直ちに自分の本當の俳句を求めることが出来るのである。ところが始末のわるいことには、季を超越したつもりでゐる人が尠くない。完全に脱線してゐるにもかゝらず、超越したと思つてゐる人は、まことに困りものである。それらの人々よりは季に對する盲目者の方が、はるかに始末がよいといはねばならない。

兩者いづれにしてもよろしくないことであるから、季に對してはもつと慎重なる考慮を拂はなければならぬ。或る人は自ら進んで季に近づかなければならぬであらうし、又或る人は季をして自分

に近づけようとしなければならぬであらう。それは第三者が口を入れるよりも、自己の眞面目なる反省に俟たねばならないものである。

俳句は季節文學であるがために、季を必要とするものである、といふやうなそんな狭い考へに捉はれてはいけない。勿論そのやうな限定範圍のもとに、俳句が成り立つてゐるのではない。そのやうな見解を固持したり、又は信仰すれば、それはいふまでもなく季語や季感といふ問題に捉はれ、俳句に季語を入れなければならぬ、季感を入れなければならぬと、遂に句の核心を忘れてしまつて、季に弄ばされ、季を弄ぶといふ結果になつてしまふのである。かの季題趣味俳句、即ち季題によつて俳句を作るべきもの、といふやうな愚論が、今以つて幅を利かせてゐるのであるから、笑止千萬なことではある。

俳句は人間を中心としたるものゝあらはれである、といふ大きな見解に立つてゐなければならぬ。これをもつと精しくいへば、われわれを圍繞する大自然は勿論のこと、われわれの生活等すべて不自然でないものが、俳句たり得るといはねばならない。こゝに於て都會の生活農村の生活の如何なる部分にも、時代々々によつて異なるところの季感を見出し得るであらう。たゞし作句對象の部分的なものに、強いて季を求めようとしても求め得られぬものがある。それは俳句の中心となり得ないものである。さうしたものはいふまでもなく、俳句の獨自性に入らないものである。その場合無理に作ると

俳句でないものが出来上ることになるが、意識的に俳句たらしめようと試みれば、中心のぐらついた俳句が作られるといふことになる。

私の言ふ新藝術俳句、即ち印象俳句は對象把握に於て直截、鮮明、芳醇、強靱等の効果を十二分に發揮させねばならないから、季の巧妙なる活用が如何に重要な役割を果すかは、敢て贅言するまでもないことである。とはいへ再び繰返すことになるが、いつまでも季に拘泥してゐてはならぬのだから、熱心に句を作りぬくことによつて、季の問題を克服し、遂に季を超越するやうになつてほしいのである。

日本を知れ

一三年前の頃は、私達の俳句が少しもわからないといつて一蹴する人が随分多かつた。甚だしい人になるとこの俳句はぬきさしのならない邪道に入つたもの、この俳句は日本語でなくて蠻語を使用したものなどと批評を下す人さへもみうけられた。しかもさうした批評子が、しばしは我等の俳句に眼を觸れてゐる人であつたり、又は曾ては私に選句を依頼したことのある人であるに至つては、本當に聞いた口も塞がらなかつた。しかし私は、俳句は藝術であるとはいひながら、小さくいへば詩であるとはいふものゝ、そこには人間の魂の通ふ侵すことの出来ない信條が流れてゐなければならぬことを

思ひ、ひたむきに自分の道を歩みつづけて來たのである。従つて最初私と、もに俳句を始めた人々や、或ひはわが集團の熱心な作家であつた人々などが、連作俳句といへば連作俳句へ走り、自由律といへば自由律へ走り、又は流行を追うて新興俳句へ、生活派などへ、轉々と動いてゆくその後姿をみて、非常に淋しく思ひ、氣の毒に思つてゐた。何故自分の俳句に信念を持たないだらうか、氣の毒といふよりは不思議にも感じられることがあつた。ことによると俳句に溺れてゐるのか、それとも俳句を作ること何等かの手段としてゐるのか、などと考へてしまへばそれまでのことであつたが。

俳句はそんな生やさしいことがらにこだはつてゐるものではない。例へば、俳句に短歌的な調子や趣を加へて改革しようとしたり、又は外國詩を取入れて直ちに改革しようとしたところ、容易に動くものではない。若しそんな半端な頭や、文學青年の生かじりの頭で、俳句が至極簡単に改革されるものだつたら、俳句はとうの昔に滅びてゐた筈である。私はさうした人々に向つて、目新しい美を夢中で探す前に、もつと深く日本を知れ、そして自己を知れといつてやりたくなる。

藝術が單に快樂の手段であつてはならぬことを知るならば、俳句も唯美を求めて詠むだけで済ませられぬことは、よく理解されるところであらうと思ふ。美のうしろには、つねに嚴然と眞や善が控へてゐることを知らなければならぬ。しかも俳句が我國獨特の藝術であるに至つては、更にそこには日本といふものが、大きく横たはつてゐなければならぬのである。

眞摯なる作家温々氏が、俳句を男子一生の仕事としてゆくことに疑問を持つ人が非常に多い、といふやうなことを述べて居られた。これを私にいはせて貰へば、多少言ひ過ぎることになるかもしれないが、さうした俳人には不純なものがあるからだ、と簡単に答へることが出来はすまいか。つまり俳句を心の遊戯と考へたり、或ひは賣名的手段たらしめようとするからではあるまいかと思ふ。更にいつてみればこんな人もありはしないか。何となく俳句を作つてみたいから作るといふ人、退屈であるから句を作るといふ人など。これは一見自由といつて済まされさうであるが、本當の意味に於ける自由ではない。自分一個人の無駄な精神消耗といつてしまへばそれだけであるが、われわれ日本に於ける一人であることに思ひをいたすとき、たゞそれだけでは済まされなくなる。

俳句がわが日本文化に寄與する使命の如何に重大であるかを體得せず句を作るとは、俳句そのものを非常に冒瀆するものだといはなければならぬ。さう考へてくると、俳句は徒に自己満足であつてはならず、日本民族の美しい發展のため、且つ又自己の心境高化のため、實に大きい役割をになつてゐることになる。それにもかゝらず、俳句を自己の賣名手段に利用しようとする輩のあるに至つては、實に擧蹙に堪へない。

俳句が短かい形式であるところから、句の優劣をわきまへぬ主幹や選者と結托し、又は情實を以て懐柔しようとする輩の如何に多いことか。しかもそのやうな輩が自己の蕪才を知らずに、努力をせず

に世に出づることの容易に近づいて來ないことを憤り、俳句に向つて聞くに堪へない不平をさへ洩らしてゐるものがある。私たちはそれらの人々をたゞ笑つて見逃してよいだらうか。私は、何時かは目の覺めることもあらうから、それ迄待つのが自然なことであらう、といふやうな考へ方を探つてしまふ。もつとも私の身近にそんな人があるならば、俳句に對する私の信條を諄々と説いてみたいと思つてゐる。

昨今戦時體制故に、又文化統制を實施されたがために、われわれは俳句を眞剣に考へ直さねばならなくなつたといふ。勿論それでよろしいが、しかしそれでは餘りに過過ぎはしなかつたか。といふものゝ、前々から眞剣な態度と方法とを維持してきた俳人も少くはないことを知り、私は俳人の一人として、心ひそかに誇らしく思ふのである。

世間周知のやうに文化方面の雑誌にも廢刊や統制の嵐が次々と飛んでくるので、俳句雑誌の運命などもあやぶまれてゐる。そして多くは悲觀的な言辭を並べてゐるやうである。折も折過日遞信官吏として驕名を謳はれた風生氏が「俳句ほど日本民族に廣く滲透した文學はないのであります。従つて健全な國民文學としての俳句の發達運用は、大革新期にある現在の情操涵養の手段としても、或ひは下意上達の文學的方法としても、日本精神の正しき認識と發揚のためにも最も大切、重要な文學であります」云々と、大政翼賛會文化部長に就任された岸田氏に對する期待を述べられてゐるが、實にそ

の人を得たともいふべく、俳句と我國民性、延ては我民族の美しき進展のために、俳句が飽くまでも正しく盡してゆかなければならぬことを、簡明に述べられたのである。

俳人塙温々論

曾ての温々氏の句には、ロマンチックな詩精神が横溢してゐた。例へば、今尙ほ私の脳裡を去らぬ數々の句のうちでも、昭和六七年頃のものに、

旅役者 残暑の海に浴びて去る

九十九里 黍下に下に良夜かな

砧 囀せ 霧深うして嫁入りぬ

の如きものがある。勿論その當時に於ては實に珍らしい叙情俳人の觀を呈し、氏の純粹無垢なる詩感、如何に多くの人々を悩殺したかしのれない。今日押しも押されぬせぬ巢場氏は、何時ぞや私にむかつて、自分は温々氏の句を最も好むものであり、自分の句も不知不識温々氏の句に影響されたものがある、といふやうなことを述懐されたかに記憶してゐる（昭和八年頃であるかもしれない）。又一峯氏を初めとして多くの俳人諸氏などは、當時大の温々最負であつたことを再三洩らされたものゝやうである。

氏のさうした傾向——甘美なる心緒にともなふ言葉や文字の音韻、抑揚、修辭的構成の調和美といつたやうなものゝ作句は、しばらくの間續いてゐた。それはいふまでもなく、暴風雨を知らない氏が思ふまゝに美しい夢をむさぼることが出来たことゝ、俳句文藝に向日的希望を飽滿に抱くことが出来たからではあるまいかと察知せられる。或時は句ぐはしく、或時は美しく、實に氏の吐息は神祕世界の氣をもたらしものゝ如く、選句の私は朱筆を措いて、羽化登仙の境に入ることさへあつたのである。これはいゝ、これはいゝのだ、これでこそ美しいロマン精神の開花結實が期待されるのだ、と氏の句稿をにらんで叫んだことが幾度あつたかしのれない。即ちこの頃は既にセンチメンタリズムを清算されてゐたのである。センチメンタリズムの時代といへば、氏が未だ東京に來られない前、神戸に在つて盛んに作句されてゐた頃であらう。氏は文學の本質、俳句の本質であるところの抒情を相當マスターされてゐたやうである。たゞ情緒の震動面を映す鏡のいろ、それを司る知性の明るさが微弱であるかに思はれた。それは氏が自ら持つところのもの、人間温々に生活、教養、知能などが加はつてゆけば自然解決される問題であり、氏の句はいやが上にも發展することである。此の點、私は氏の句を見るごとに、このまゝを行かれよ、と絶えず希つてゐたのであつた。

然るに氏の周圍の人々は、氏の句が想像力に豊富なる内容を持つところから、世間を知らない、苦勞を知らない、青春の夢がもたらす所産である、とまで風評してゐたやうであつた。いふまでもなく

さういふ人々は、早くより打算の生活に慣れて理智に尖り、可惜詩精神を磨り減らしつゝ、徒に形式の奇を追つかけてゐたやうである。

温々氏の俳句は私が豫測したやうな道を辿られるであらうか、それとも新しい道を発見して進まれるであらうか。これについては本人自身もわからないのであるから、まして私などにはわからう筈がない。やがて職業戦線に立たれ、しかも氏が想向する文學とは最も背反した金融の一部門に携はられることとなつたのである。

此處に於て氏の句は、生活が包含するあらゆる土壤の養分を吸収して、浪漫が愈、獨自な方向へ、深く鮮かに根を持つことになるのではあるまいかといふ期待と、それと反對に氏の美しい浪漫精神の花園が、生活の色彩や悪臭や其他の凸凹などによつて、可成阻害されるところがありはせぬか、といふ懸念が持たれるのであつた。それからもう一つは、年齢が俳句の上に如何なる投影を示すであらうかといふこと、それこれを考へると、私の喜憂は一方ならずさわがしく、氏の句を特に注視せざるを得ない立場となつたのである。

それからは私も氏に面接する毎に、如上の意味に於て出来るだけ力になるために、或ひは直接に或ひは間接に、氏獨自な浪漫精神の發展に努力せらるゝやう、注意することに怠りなかつたつもりである。しかし誰しもおなじことではあるが、私の考へるやうな、そんな都合のよい作風を示される氏で

はなく、あきらかに生活と年齢の壓迫による變貌を見せられることもあり、俳句の上に相當辛酷な位相を採られることさへもあつた。

かゝる異變は、たとへそれが氏に課せられた試練ではあるにせよ、稍、もすると俳句の本質なる抒情精神が薄れ、屬性なる對象、スタイルなどに主力を傾けられるやうなこともあつた。先頃流行を恣にした新興俳句などは、あきらかに藝術の本質と從屬性とを履き違へたもので、現實する新しい對象を捉へることゝ、俳句のスタイルをモダン化することに致々として、藝術の本領なる抒情精神を喪失し遂に混迷、又は俳句的自殺にまで到らざるを得なくなつたのである。

温々氏もインテリとして再三大きな暴風雨に見舞はれたが、よく棹をあやまらずに進まれてゐる。それは毎月々々の作句が雄辯に物語つてゐるから、一々それを引用するまでもあるまい。氏は徒に生活、詳しく云へば現實生活、更に云へば物質生活と精神生活、尙ほわかり易く云へば、現實する生活と俳句のチャーナリズムに壓されることなく、或ひは翻弄されることなく、絶えず自分の軸、即ち人間温々を中心にして、ひた押しに押し進んで居られる。此處に氏の強い文藝愛と云はうか、情熱がかゞはれるのである。従つて氏は近き將來に於て、必ず大温々を形成されるものであると言ひ得る。

今日の未完成は明日の美しき發展への階梯として欣ばねばならぬが、敢て氏のために苦言を呈上するとすれば、これは再び氏の虚を衝くことになるかもしれないが、俳句の形態音律などに若干浪漫精

神が薄れつゝあることを認め得るのである。ときに氏の句を鑑賞し思ふことであるが、現實の生活面を把握することにのみ急にして、氏独自のあたゝかい夢が顔をかくしてゐやせぬか、又は強烈なチャイナリズムに依りて、いさゝか氏の體臭が消されつゝあるではあるまいか、などの懸念がないでもない。

これは私がいふまでもなく、現實克服による新しい自己發見の苦闘がもたらすところのあらはれであるから、飛躍にともなふ未完成として、決して非難すべきものではない。否却つて欣ばねばならぬものであらう。たゞその場合の不用意、それは氏が餘りにも正直なために、豊饒な詩精神を生活して居られるにもかゝらず、大膽な叙法を持ち運び得られぬではあるまいか。その結果は詩精神に瘦せた句となることが當然である。といつて大膽な表現がこの悩みを征服するものではない。所詮氏は鬱勃たる浪漫精神を果敢に成育することによつて、大溫々の明かなる風手を具へて來るものであらうと觀られるのである。

孤 獨

洋の東西を問はず、古來藝術は孤獨なものであると稱せられて來た。すなはち孤獨な人のものする藝術が、最も正しいものであるといふ意味に他ならない。これをなほわかり易く云へば、孤獨な人の

告白する藝術、こゝに於ては俳句に就て云はうとするのであるが、例へば孤獨な俳人が洩らすところの悦びや悩みといふものは、最も正しい藝術俳句をなすものであると云つてよろしい。何となれば孤獨であるがために、ごみごみした周囲の塵埃を浴びることなく、つねに人生の眞實なる法悦と苦惱に同居してゆくことが出来るからである。

さておかしき言ひ方であらうが、百萬の大衆は、實は孤獨な人の味方である。それはいふまでもなく、孤獨な人がいつも正しい現實相を把握し、眞實なる人間性を吐露するがために、心が相通ふのである。一般に孤獨と大衆性とは相反した面のやうに考へられるが、それは全然間違つてゐる。大衆といふものは、複雑な生活に忙殺されてゐるから、孤獨な俳人が感得するやうな法悦・苦惱に接觸する機會が非常に稀であるといふに過ぎない。それ故に俳人はチャイナリズムなどに支配されずに、もつともつと孤獨にならなければならない。

この點一ツ時の人氣を博するやうなもの、例へば流行をほしきまゝにするやうな傾向の俳句は、そのグループだけに於ては、さながら最高の俳句を征服したものゝやうにもてはやされるかもしれないが、決して多くの人々の核心に觸れるものとはかぎらない。否觸れることが尠いといはざるを得ない眞實なる俳句を求める人々の、こゝろすべきことではあるまいか。

俳人小日向隆論

最近いたるところに新興俳句敗北の語がかゝげられ、又某新興俳句雑誌は旗艦の句「硬き豆嚙めばたそがれ夜となる……丹吾」と昭和川柳の句「夕焼をあびてかた豆かんでゐる……義雄」をならべて俳句か川柳かそのけぢめのつかなくなつたことを悲しんでゐる。さうかと思ふと虚子翁は「俳句は傳統の文藝であります。十七字、季題といふ極端な制限がある限り、根底からさう新しいことが出来るものではありません」とレコードに吹込んだ。

さうすると、俳句は古い殻を破つて新しく飛躍出来ないものか、はた又飽くまでも傳統をそのままに護り続けて行かねばならぬものか、といふ問題になるが、私は兩者を肯定することが出来ず、直ちに否定する立場にたつものである。その理由とするところは多々あるが、今はそれを究明しようとするのが本題ではなく、小日向隆氏の俳句に就て論じなければならぬから、ともかくも先を急ぐこととしなければならぬ。

今更俳句の本質でもないが、古來俳句は主観と客観、人間と自然の二元を見てゆくところにつまり宇宙を一元的に見たものゝ所産が日本的なるものであり、その代表的な文學が俳句であるといはれ、即ち主客一元の境地を詠むところに、俳句としての動かすべからざる特質を具へてゐるのだ、

といふことが出来る。この説を推し進めてみれば、俳句は若い者の文學ではなく、老人の文學であり内容的に見ても、若さよりは老いの多分に含まれるところに、嚴然と俳句の性格がひそんでゐるものであるといはれよう。

この説を否定するのではないが、この説がもつ若干の誤謬を征服したところに、小日向隆氏の俳句が位置を占めてゐる。詳しくは後述しようと思ふ。

一寸話が離れるやうであるが、昔もさうであつたやうに、今日もさうであるが、俳人の雅號、句集の名稱、俳句雑誌の名稱等が、季節と如何に密接な關係に置かれてゐるかはいふまでもない。毎日全國の俳人によつて産出される俳句の過半数は、四季の變化による氣象學的記録であるといつても差支あるまい。この點私はそれらの俳句を稱して「氣象學的俳句」と呼びたいのである。これに反して小日向隆氏の俳句は、さうした傾向が非常に稀薄であり、悉く鋭敏なる神經の活動によるところの「感覺俳句」をもつてうづめられてゐる。こゝに氏の俳句の大いなる特色が見出される。尙ほそれらに就ては、例句を掲げて後述したいと思ふ。

次に氏の句として見逃せない特徴に二つがある。その一つは、言葉の魔術師ではあるまいかとさへ思はれるほどの冴えたる腕、就中「てにをは」の巧妙なる驅使によつて、美事に表象の暗示性を高められてゐることである。もう一つは、

異常なる色彩俳句といはうか、氏独自の發明による「五色の眼鏡」が天地自然を微妙に映寫するがために、其處には美しい色彩の夢がつくり出されるのである。

それでは氏の俳句の検討に移らう。

山鳩の眼に秋空のゆるゝ晝（昭和七年）
一色の山遠寒し鳥かへる（同）
霜ぐもり薄陽わづかに地に動く（同）
竹の葉へおぼろさ霽の村囃（昭和九年）
雲へ雲へつれたち蟲の走る翅音（同）
朝焼の雲呼ぶ鳥が墮ちそうな（同）

前三句は句集「峰座」に、後の三句は句集「夜明け」に掲載されたものであるから。大體その頃の作、即ち前者は昭和六七年頃の作、後者は八九年頃の作と見てよいであらう。それから右の句は作者自身が數多い自作の中から選ばれたものであるだけに、代表的な作と見てもよろしいであらう。

この初期の作は、いづれの句を見てもわかるやうに、對象の美を殊更らしく取上げられた痕跡がある。よく云へば、こゝが氏独自の句を形づくる技巧であり、わるく云へば、自然と自己の不一致、その間隙を技巧によつて糊塗されたものゝやうにも見られるのである。技巧、それは氏の句に於て避け

られない特徴をなしてゐるが、一般に批判されるやうな技巧とは、自ら趣きを異にしてをり、氏らしいにほひが非常に濃く著いてをり、従つて直ちに隆氏らしい親しさを呼ぶといふやうな力をもつてゐる。

私は時々氏の句を讀みつゝ、技巧は遂にその人をつくる、といふ感にうたれることがある。こんなことは本人の隆氏に取つては非常に迷惑なはなしであるかもしれない。即ち氏の言ひ分にすれば、自己が技巧をつくつてくれるのだ、と反對に立腹されるかもしれない。ともあれ、私は過去に於て私の頭に映じたことを率直に申述べて置くこととする。

次には昭和十年十一年十二年頃の作であらうか、黎明十周年記念に出版された「黎明俳句集」の中から三つ四つ抜萃してみると、

月よりの蛾も來よ師走の街におどろ（昭和十二年）
いたつきは陽の春泥を戀ひ暮らし（同）
醉ふすべもほどく春の月の風ぎ（同）
野火へ陽のうすれめでたき眉を戀ふ（同）

などの句があり、續いて昭和十三年十四年頃の作には、左の如き秀句をもものされてゐる。

石の冷えしむ掌へしきり海鳴りす（昭和十四年）

月指せば月の蛾となり京扇（同）
 けものゝ腫いたく陽を追ひ秋立つを（同）
 太陽は香となり海にすゝき散る（同）
 手毬歌の陽ぞらへかほど手をたゝく（同）

一讀再讀忽ち第三者をして恍惚境に誘ひ込まずに置かぬといふやうな、魅力の豊富な句が充満してゐる。これは技巧が垢抜けしたせい、それとも対象と自己とに於けるギャップが無くなつたせい、或ひは双方の力に俟つものであるかもしれない。併しながらさうしたせん、はともかくとして、この作者ならではの思はれる構想と表現手法とが確立されてきた。たゞに小手先の表現技巧が巧妙になつてきたものでなく、その底には俳句製作態度に一段と飛躍したところがあつたからである。恐らくはこのごろは、小日向隆俳句として自他共に許す、高度の俳句観が築かれてゐたものである。もはや取材の妙とか、技巧の妙などといつては片附けられなくなつて來た。妙なる言葉や文字は、人間隆氏がつ詩囊を絞つたエキスであり、対象の美事なる組合せ、それは氏が人に告げることの出來ない、美しい夢の氣を帯びたものである。又そのリズムも同様に。

作句傾向から云へば、昭和六年より十一年頃迄は、どちらかといへば常に対象に負かされてゐた。その結果俳句となつたものには、技巧が強く現はれてきたのであるが、十二年から十四年頃に至つて

は、対象と完全に握手することが出來たといはうか、対象に負けず自己に勝たず、其處に均衡のとれた句が氏の影の如くに産み出されたのである。

それが更に進んで去年今年は、どんな方向へ伸びてきたか。今「第二黎明俳句選集」から、氏の代表的な句を覗いてみよう。

二つ虹あわや大野の草ほつれ（昭和十五年）
 鳥翔てばいづれ野の罌粟咲きつくす（同）
 炎天をめぐがけて群羊流れ移く（同）
 鹽を採る湖の謎など鳥歸る（同）
 長城のひろごる闇へ謀みぬ（同）

續いて今年の作には

冬晴野どこまで想ひあやす氣ぞ
 うすれ陽につたなし冬の卦を云はず
 燭の色へうつり香さても廟の秋
 十六夜の月へ思郷の唄かとも
 人聲はつひに四温の宵つくる

以上の如き佳作がある。但し昨年も今年も共に蒙疆北支の作であるから、一段と趣向の變つてゐることはいふまでもない。

最近の作句傾向を一言にして申せば、氏の境地は愈々高くなり深くなり、人間隆氏を建設しつゝあるといふことを云へる。勿論、さきに私が指摘した特長なる文字・言葉の魔術的操作は、美事といはんよりはむしろ驚異的なものとなつてきてゐる。又俳句的性格として、内容は閑寂に、形態は老衰的硬化にかたむくところを、氏の句は實に反對に内容は愈々濃刺、形態は愈々新鮮に。その前進には、又耕作にはわれわれをして豫測せしめないものがある。

先頃詩人萩原朔太郎氏は、「けだし俳句は、日本語の歸結すべき最後の究極的ポエディ形態であるだらう」と、こんなことを云つてゐたが、小日向隆氏は缺點の多い日本語をして、最大の效用、即ちシンボリックな聯想を十二分に働かしめる祕法を知つてゐるのではあるまいか、などと思はれる一人である。例へば、右に並べた句に於ても、「二つ虹あわや」「草ほつれ」「いづれ野の罌粟」「炎天をめぐけて」「湖の謎など」「闇へ謀みぬ」「どこまで想ひあやす氣ぞ」「うすれ陽につたなし」「うつり香さても」「思郷の唄かとも」「つひに四盞の宵つくる」等悉く氏の句は、わが國語の長所を魔術的に活かし、最短詩形の表現効果を巧妙に發揮させてある。氏の一句々々を鑑賞する毎に、如何に多くの努力が費されてゐるか、私は容易に理解することが出来る。

今日の俳人の作句を見て、時折遺憾に思ふことであるが、美しい夢に豊富な人であるにもかゝららず、國語の使用法が幼稚であつたり、或ひは反對に國語の使用法は實に老練であるが、内容的に貧困であるといふやうな人が少くない。そこへゆくと隆氏は共に兼ねそなへた人であるから、強靱堅固な作家として讃辭をおくらなければならぬ。

最後に私は氏の句の短所を衝かねばならぬのであるが、それを簡単に云へば、對象過重、技巧偏重に流れやすく、そのために独自の詩精神が蝕ばまれはせぬか。氏の句の陥り易い畏といへば、それが畏であるともいへよう。それを警戒しようとするならば、とりもなほさず情熱を失はぬこと、ならびにロマンを失つてはならぬことである。

俳句と説明

私の出席する俳句會に於て、又は机上に於ける選句に際して、痛切に感じられることの一つは、俳句に説明の多いことである。自然句會の席上講評の場合、この句には説明が多過ぎる、これだけの説明は餘分なものである、などと私の口から苦言を聞かれた方も尠くはないであらうと思ふ。私は句會に招かれて大抵の場合にさうであるが、若干時間のあるやうなときには、質問として、特に自信のある句でありながら、どうして今夜の句會に入選しなかつたか、附に落ちないと思はれるやうなところ

があれば、それを遠慮なく質問して貰いたい、と言つてゐる。

その時に提出される句は、どちらかといへば一見非難の打ちどころのないやうな句が多い。或ひは素材に於て或ひは音韻に於て、或ひは「てにをは」の措置に於て、或ひは抑揚に於て、或ひは言語の修辭的構成などに於て缺點はいさゝかも見出されない、成程作者が自信たつぶりであるのも當然だと思はれる句に接する。しかしさうした句は實に惜しいことではあるが、みんな申合せたやうに説明に傾き過ぎてゐるのである。そこで質問される一句々々に就ては、その際一々吟味して、説明が如何にして不必要であるか、なほ説明の過剰なる部分を指摘してから、納得のいくやうに申上げてゐる筈である。

こゝに又々繰返すやうなことになるかもしれないが、俳句には何故説明が邪魔であるかを、多くの俳人のために一言觸れて置きたいと思ふ。今更こんなことを言ふのはどうかと思ふが、俳句の本質の一つとして、俳句は常識的にも詩歌俳句と謂はれてゐるやうに、「詠ふ」ものであつて、「描く」ものではない。詠ふためには、飽くまで主觀に徹底しなければならぬのである。私が過去十數年、主觀尊重、個性尊重と口をからして叫んで來たのも、即ちこのためである。主觀を否定した俳句は、眞の俳句とは云はれない。たゞ形に於ては俳句と稱することが出來ても、主觀のない俳句は俳句精神を喪失した俳句と云はねばならない。

凡そ文學に於て「描く」ところのものは、嚴格なる意味に於ては、小説あるのみである。小説は飽くまでも客觀的に描いてゆくところに、その本質をそなへてゐるといへよう。然るに俳句は詩の一領域として、絶對に詩的精神を忘れてはならないのである。しかも詩的精神は、つねに主觀の中にしか存在しないのである。かやうなわけであるから、客觀寫生の句、自然描寫の句などは、俳句として如何に價値の少いものであるか、よくよく諒解されることであらうと思ふ。

さて俳句に説明の多過ぎるといふこと、それは何を意味してゐるかといへば、主觀性、つまり詩精神が乏しく、客觀性即ち描くことに片寄り過ぎてゐるといふことに他ならない。これを平たく云へば、情景を描くことに説明を費し過ぎてゐるといふことにならう。けれどもこれだけでは、充分意を盡したとはいはれないかもしれない。といふのは對象描寫の句でなくて、主觀の説明を多分に盛つた句が、案外尠くはないのである。従つて或る人によつては主觀説明に陥つてゐることを忘れ、自分の句は「描いた句」ではなくして、「主觀を詠んだ句」であるから、眞實なる自己の句である、と詰問されるやうである。

主觀も説明に傾けば、或ひはくどくなり、或ひはきたならしくなり、遂には折角の詩的精神を破壊してしまふ、といふやうな結果をもたらすこともあるから、出來るだけ説明をふるひ落すやうにしなければならぬ。説明のない詩的素材の調整、さうした句であればこそ第三者は、作者が説明しよう

とした以上の、或ひはその幾倍かの芳味を感受するものである。それほどに、俳句に於て説明するといふことが不必要である。

古典を活かす

現代は過去の延長である。古俳人・古俳句があるからこそ、われわれ今日の俳句は生命を得てゐるのである。われわれが今日の俳句をして、愈々飛躍させ愈々清新な息吹を興へようとするならば、更に更に古俳人・古俳句に接近して、古き俳句精神のありどころを把握しなければならぬ。それほどに古俳人の存在は尊重せらるべきものであり、それほどに古俳句の存在價値は重大なる意義を持つものである。

俳人に性急は禁物であるにもかゝらず、多忙なる現代人は古俳人に親しみ古俳句を愛するに先立ち、とかく古典の巧拙を批判したがる傾向がある。批判はそれが十分なる用意のもとになされたとしても、往々にして粗に陥り、又温かさを缺くことが多い。温かい批判とは實によい言葉であるが、俳句文藝に於てはこれほど實行困難なことがあるまい。従つてわれわれは批判することは後廻しにして、先づ俳人に親しまなければならぬ。さうして心からなる愛を以て古俳句を讀まなければならぬ。古典を己れのうちに活かすこと、古典を現代に活かすことは、これが唯一の捷徑であるまいか。

俳人と日本精神

先日雅叙園に於ける内山雨海氏の出版記念會席上、太古文化研究會理事大野氏は著者に贈る祝辭とし、激動の辭として、次のやうなことを強調された。古來歌人には勤皇家が多いが、俳人には勤皇家がない。従つて風流の道に没頭した人は、在世を謳歌される丈けであつて、恰も蜉蝣のやうに聲名も消えてしまふ。俳人たる著者はこの點に留意して進みたい、といふやうなことを述べられたやうである。勿論著者も勤皇文化振興會の役員であり、同席には勤皇文化振興會々長始め、その會の關係者も可成列席されてゐる。これを聽いてゐた私はわが胸に大きな杭を打込まれたやうな、居堪まらない苦痛を覺えた。

あなたがち全部を肯定するのではないが、一面の事實を穿つた言葉として、頭を垂れざるを得なかつたのである。これについて思ふことであるが、果して俳人には勤皇家が居らないか、それとも勤皇家は俳句を作らなかつたであらうか。概して云へば、古來俳句の精神が勤皇精神からあまりにも離れてゐた、といふ事實を認めないわけにはゆかない。

大體俳句そのものが勤皇精神と没交渉であつてよいかどうか、といふことが問題であるが、俳句が日本文學の一面に嚴然たる位置を保持する限りに於ては、勤皇精神を離れて存在しないといふことを